

BUNKYO ACTION PLAN 2025

総括報告書

建学の精神 『人間愛』

『人間愛』とは、人間性の絶対的尊厳と、その無限の発展性とを確信し、すべての人間を信じ、尊重し、あたたかく慈しみ、優しく思いやり、育むことである――。

『人間愛』の精神は、なによりも「生命(いのち)を大切に作る心」の上に成り立っています。

すなわち、私たち一人ひとりの生命(いのち)は、それが誰の生命であっても、かけがえないもので、何ものにもかえ難く大切であると考えます。『人間愛』の精神は、人と人とが認め合い、尊敬し合い、許し合い、思いやる、そういう社会が必ず実現することを望み確信する心です。

これを学園のミッションとして各校で実践し、今日では、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、外国人留学生別科、大学7学部、専攻科、大学院5研究科を擁する総合学園に発展してまいりました。

文教大学学園は『人間愛』の教育の実践は「園児・児童・生徒・学生の喜ぶ顔が見たい。子どもたちに悲しい思いをさせない。悲しむ顔は見たくない」にあると考えています。こうして本学園では、教職員と子ども、子どもと子ども、教職員と教職員の間で『人間愛』の精神を醸成し続け、展開されているのです。

『人間愛』をベースに総合学園としてさらなる発展を遂げる
文教大学学園経営戦略中期経営計画

文教大学

越谷キャンパス

埼玉県越谷市南荻島3337

[大学] 教育学部/人間科学部/文学部
[大学院] 人間科学研究科/言語文化研究科/教育学研究科
専攻科/外国人留学生別科
大学付属研究所/大学院付属研究所

湘南キャンパス

神奈川県茅ヶ崎市行谷1100

[大学] 情報学部/健康栄養学部
[大学院] 情報学研究科
大学付属研究所

東京あだちキャンパス

東京都足立区花畑5-6-1

[大学] 国際学部/経営学部
[大学院] 国際学研究科

文教大学附属中学校・高等学校

旗の台キャンパス

東京都品川区旗の台3-2-17

文教大学附属小学校

石川台キャンパス

東京都大田区東雪谷2-3-12

文教大学附属幼稚園

旗の台キャンパス

東京都品川区旗の台3-2-17



message

教育カトップの 学園を目指して



文教大学学園は、1927年創立の「立正幼稚園」、「立正裁縫女学校」を端緒として、現在では学習する園児・児童・生徒・学生の総数が1万人を超える総合学園として発展し、2025年には創立98年を数えます。これまでの学園の発展は、ひとえに関係各位のご支援の賜物であり、厚く御礼を申し上げます。

国内外の経済や社会の構造が目まぐるしく変化中、来たる学園創立100周年を含めた今後の学園のさらなる発展のためには、一層の教育力向上や経営基盤強化が求められる状況となっております。こうした課題意識のもと、中期経営計画として2009年度から学園経営戦略を3期12年間にわたり推進してまいりました。

「第4次中期経営計画：BUNKYO ACTION PLAN 2025」は前計画における改革の実績を踏まえて、各校の主体性を重視し、具体的な目標や事業計画（アクションプラン）をその主体となる各校が策定・実行する枠組みを堅持しつつ、浮かび上がった課題の改善や新たな取り組みを加えた計画として実施しています。

掲げた目標達成に向けて、大学及び付属学校からなる学園全体における志願者獲得や教育力、進学実績、就業力の向上、経営における財政基盤の安定や組織ガバナンスの強化、各校の連携などの計画を鋭意実行してまいりました。

これからも学園は建学の精神・理念である「人間愛」をベースとしつつ、「教育カトップ」の学園の実現を目指して、教職員一丸となって、努力してまいります。皆様におかれましては、これまでと同様に厚いご支援を賜りますよう、お願い申し上げます。

文教大学学園 理事長 野島 正也
MASAYA NOJIMA

『BUNKYO ACTION PLAN 2025』 構成及び実施体制

I. 『BUNKYO ACTION PLAN 2025』

『BUNKYO ACTION PLAN 2025』では各校の改革推進の実質化を図るために、「経営・管理」が計画を下支える体制のもと、学園の「4年後の目標」を掲げ、推進主体である各校が右記123を策定して実行しました。

II. ビジョンマップ ▶P.3~4

学園の「MISSION」及び「VISION」に基づいた学園全体の「4年後の目標」と「達成指標」を設定し、そこから各校との連携やアクションプランとのつながりをわかりやすくするためにマップ化しました。

III. 実施体制

各校が主体となり、各アクションプランを実行しました。理事会は「経営・管理」のアクションプランを実行していくことと合わせて、評価・改善の部分でも関わり各校の計画推進の支援を担っています。

IV. 進捗管理

PDCAサイクル(Plan・Do・Check・Act)で計画・実行・評価・改善を行い、計画を推進しています。各校から年1回、理事会にアクションプランの進捗や達成状況について報告をすることで評価を行い、改善が必要な場合は、各校と理事会で相談して最適な方法を模索し実行しました。

1 4年後の目標：達成指標

4年後に各校が「目指している姿」を設定。そして、「4年後の目標」が達成しているかどうかを判断・評価するための目安となる「達成指標」を設定

2 カテゴリー分け：4年後の具体目標

各カテゴリーに分けた上で可能な限り絞り込んだ具体的に目指す「4年後の具体目標」を設定

3 アクションプラン

具体目標を実現するための施策を設定

『BUNKYO ACTION PLAN 2025』
アクションプラン(No.)

文教大学	★ A101 ~ ● A119	▶ P.5~8
中学校・高等学校	● B101 ~ ● B118	▶ P.9~12
小学校	● C101 ~ ● C120	▶ P.13~16
幼稚園	● D101 ~ ● D120	▶ P.17~20
経営・管理	● K101 ~ ● K113	▶ P.21~22

文教大学学園 中期経営計画の推移



MISSION 『人間愛』の教育

VISION 教育カトップを目指す

4年後の目標

総合学園の維持・発展

「ていねいにたくましく育てる文教」を実践し、トップクラスの教育機関を実現する

達成指標

学習者1万人以上 学習者の満足度90%以上

P.05~

大学

4年後の目標

学生が成長を実感できる大学



達成指標

学生生活の満足度向上
実志願者数7,000人の確保

アクションプラン [カテゴリー | 4年後の具体目標]

重点事業 | 大学認知度の向上とアイデンティティの醸成

A101 A102

学生募集 | 志願者・入学者の安定的な確保

A103 A104

教育 | 質の高い教育の実施

A105 A106 A107

研究 | 研究体制の充実

A108 A109 A110

学生支援 | 充実した学生生活の提供

A111 A112 A113 A114

附属学校 | 総合学園としての発展

A115

地域社会貢献 | 大学と地域との連携による学内の活性化

A116 A117

国際交流 | 国際交流の活性化

A118 A119

P.09~

中学校・高等学校

4年後の目標

『人間愛』の精神を育み、グローバルな社会・ポータブルな社会で活躍できる人間の育成

達成指標

生徒・保護者の本校への入学満足度90%の達成
難関大学合格者130人以上の達成

アクションプラン [カテゴリー | 4年後の具体目標]

募集・広報 | 入学者の質と量の確保

B101

教育 | 生徒の学力向上

B102 B103 B104 B105

研究 | 教員の指導力向上

B106 B107

生徒生活 | 礼儀と規律ある生徒の育成

B108 B109 B110

進路・キャリア | さらなる進学実績の向上

B111 B112 B113

地域・社会連携 | 『人間愛』の精神の育成

B114 B115 B116

国際交流 | 海外研修プログラムの推進

B117 B118



P.13~

小学校

4年後の目標

「ふるさとのような学校」において世界に羽ばたく国際人の育成

達成指標

倍率3倍以上の安定した志願者の確保
在校生並びに保護者の満足度90%以上の達成



アクションプラン [カテゴリー | 4年後の具体目標]

募集・広報 | 倍率3倍以上の安定した志願者の確保

C101 C102 C103

教育 | Society5.0時代を生き抜く人材育成
21世紀型スキルとしてのSTEAM教育の推進

C104 C105 C106 C107

研究 | 1時間ごとに成長できる学校「深い学び」の推進
文教大学附属小学校型アクティブラーニングの確立

C108 C109

児童生活 | 人間愛あふれる「文教っ子八か条」に基づく豊かな教育の実践と推進

C110 C111 C112

進路指導 | 一人ひとりの夢を実現させる進路指導

C113 C114 C115

保護者・社会連携 | 学校教育と家庭教育の連携
地域に貢献し地域に愛される私立小学校としての確立

C116 C117 C118

国際交流 | オーストラリア短期留学の充実
外国語教育の充実

C119 C120

P.17~

幼稚園

4年後の目標

満足度が高い選ばれる幼稚園

達成指標

募集定員60人の安定確保



アクションプラン [カテゴリー | 4年後の具体目標]

募集・広報 | 安定した入園者の確保

D101 D102 D103 D104 D105

教育 | 素直で明るい元気な子どもの育成

D106 D107 D108

研究 | 新幼稚園教育要領に則したカリキュラムづくり

D109 D110 D111

園児生活 | 遊びを通して“生きる力の素”を育む

D112 D113 D114

進路支援 | 附属小学校及び希望する小学校への進学実現

D115 D116 D117

保護者・地域連携 | 保護者との連携強化
地域に根ざした幼稚園の確立

D118 D119 D120



P.21~

経営・管理

アクションプラン [カテゴリー | 4年後の具体目標]

組織 | 変化に対応できる組織力の強化

K101 K102 K103

財政 | 強固な財政基盤の確立

K104 K105 K106 K107 K108

教育環境 | 競争力をもった教育環境の整備

K109 K110 K111

学園ブランド | 学園ブランドの強化

K112 K113



「教育力の伝統校」の系譜を未来へとつなげる

文教大学

少人数をベースとした密度の濃い学びに高い実績と定評をもち『人間愛』・人と人の絆・SDGsへの貢献を教育研究の柱にさらなる進化と発展を目指しています

4年後の目標

学生が成長を実感できる大学

達成指標

学生生活の満足度向上
実志願者数7,000人の確保

具体的な取り組み

重点事業 | 大学認知度の向上とアイデンティティの醸成

A101 SDGs(Sustainable Development Goals: 持続可能な開発目標)の普及と推進 ▶p.6

- 啓発活動の実施(学内各所へのポスター掲出など)
- SDGsを推進している組織としての認証を受けること
- SDGsを取り上げた授業の紹介
- 地域社会に向けて発信するための公開講座などの実施

達成度 **80%**

A102 バーチャルミュージアム「(仮称)文教Museum」の立ち上げ ▶p.6

- コンテンツの収集、発表資料の作成
- 情報発信手段の構築(特設ホームページなど)

達成度 **90%**

学生募集 | 志願者・入学者の安定的な確保

A103 今後の学生募集対策の検討 ▶p.6

- オープンキャンパスを含めた広報活動の再構築(SNSの活用など)

達成度 **75%**

A104 データ活用による入試戦略の構築 ▶p.6

- 入試制度の見直し(検定料割引制度、特待生制度、繰上げ合格等制度)
- 新たなマーケットからの志願者を獲得するための入試方法の考案

達成度 **75%**

教育 | 質の高い教育の実施

A105 留年者数及び退学者数の抑制 ▶p.6

- 留年者及び退学者を抑制するための学生支援体制の強化(各研究科・学部の実績不振者対応、担任制度、オフィスアワー、学生支援室、保健センターなど)
- 新たなサポート体制の構築

達成度 **75%**

A106 教育質保証の確立 ▶p.6

- 効果的な授業形態や授業方法の検討
- アクティブラーニング科目の充実 ●効果的な教育DXの導入
- 学習成果の可視化の確立 ●学習成果の把握方法の確立

達成度 **50%**

A107 IR(Institutional Research)実施体制の確立 ▶p.6

- IR活動を目指した学内外データの一元化の検討

達成度 **50%**

研究 | 研究体制の充実

A108 外部資金獲得の支援体制の強化 ▶p.7

- 補助金を含めた外部資金獲得のための支援体制の強化
- 研究推進のための体制の整備

達成度 **75%**

A109 大学院の充実 ▶p.7

- 教員の研究成果の公開体制の充実、大学院の認知度向上

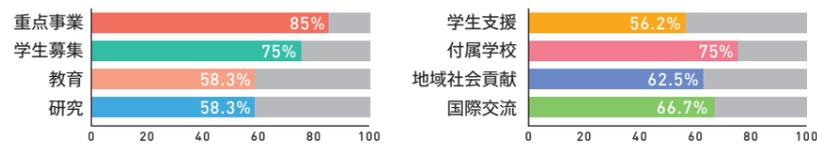
達成度 **75%**

A110 学部・研究科の枠を超えた研究の支援 ▶p.7

- 学内の教育研究予算を利用した研究支援制度の創設

達成度 **25%**

カテゴリ別達成度



学生支援 | 充実した学生生活の提供

A111 新たな奨学金制度の創設の検討 ▶p.7

- スカラーシップ入試制度の構築
- 全国入試特待生制度の見直し

達成度 **25%**

A112 キャンパスの活性化 ▶p.7

- 産学共同事業の推進、外部からの研究費や寄附金の獲得
- リモートワーク普及による東京から湘南への移転希望企業やスタートアップ企業のオフィス誘致の検討

達成度 **75%**

A113 3キャンパス間の連携 ▶p.7

- オンラインなどを活用した課外活動の合同実施
- 越谷キャンパスと東京あだちキャンパスの施設の共同及び相互利用の実施

達成度 **75%**

A114 キャリア支援のさらなる充実 ▶p.7

- 希望する進路先への決定率の向上を目指すこと
- 各種資格試験の合格率向上を目指すこと

達成度 **50%**

付属学校 | 総合学園としての発展

A115 付属学校との関係性強化 ▶p.8

- 「人間愛」理念の浸透
- 教育課程の接続の検討
- 付属学校と連携した教員養成プログラムの充実

達成度 **75%**

地域社会貢献 | 大学と地域との連携による学内の活性化

A116 社会連携活動の強化 ▶p.8

- 他大学との連携の促進(オンラインなどの活用)
- 組織的な各種ボランティア活動の展開

達成度 **75%**

A117 高校との連携強化(高大連携) ▶p.8

- 教育課程の接続の実施
- 高大連携による教育活動の推進

達成度 **50%**

国際交流 | 国際交流の活性化

A118 学生の留学支援体制の充実 ▶p.8

- オンラインによる海外研修などプログラムの開発
- オンラインによる海外研修プログラムなどの体制整備

達成度 **75%**

A119 外国人留学生の受け入れ体制の充実 ▶p.8

- 留学生と日本人学生・教職員、留学生間の交流機会の充実や促進
- 学部を超えた交換留学生の受け入れ体制の整備
- 別科、学部・研究科との連携強化

達成度 **58.3%**

※達成度のパーセント表記について 各施策項目で検討した目標に向けた取り組みや数値などに対する達成度合いを以下の達成指標をもとに示したものです。(2025年3月現在)
[達成指標] 100%:プログラムの開始、制度の創設、組織の設置、施設の完成など、計画のすべてを達成/80%:プログラム、制度、組織、施設などの具体的な計画を実行中/60%:実施計画を策定/40%:事業策定/20%:構想段階

主な実施状況

★ A101 SDGs(Sustainable Development Goals: 持続可能な開発目標)の普及と推進

SDGsの普及と推進を目指して、東京あだちキャンパス周辺における月例の清掃活動にはじまり、学内教職員へのSDGs意識調査、SDGs特設サイトを通じた学内外への情報発信、自治体が行うSDGs/パートナー制度への登録などに段階的に取り組んできた。まず、2022年度は、認知度アンケートの質問項目や今後の流れを検討の上、実際に意識調査[SDGs認知度アンケート(対象:学生、教職員)]及びSDGsに関連する授業や事業の調査[授業、事業におけるSDGsへの取り組みに関するアンケート(対象:教員)]を実施した。2023年度には、文教大学学生の通称名使用取扱内規を制定、施行のほか、SDGsに関わる学内の様々な取り組みの集約・一元化を目的としてSDGs特設サイト(BUNKYO×SDGs)を開設した。またあだちSDGs/パートナーへの登録を行い、キャンパス周辺自治体とのSDGsに係る協力関係を構築した。2024年には、かながわSDGsパートナー、埼玉県SDGs/パートナー及びそらかSDGs/パートナーに登録し、自治体とのSDGsに係る協力関係を広げたほか、東京あだちキャンパスの不要なアクリルパーテーションを用いたアップサイクルグッズを制作し、卒業記念品として卒業生へ配布した。

【評価・次期に向けて】SDGsの浸透度及びSDGsへの貢献度は、ともに満足できる状況となっており、今後も学内での活動のみならず、キャンパス周辺の地域と連携しながら、教育活動や地域連携活動を通して、SDGsの達成に向けて推進していきたい。また、大きな関心がよせられているNext SDGsにも積極的に取り組みたいと考えている。

★ A102 バーチャルミュージアム「(仮称)文教Museum」の立ち上げ

大学認知度の向上とアイデンティティの醸成を目標に、コンテンツの収集や情報発信手段の検討(特設ホームページなど)に取り組んだ。2022年度から、文教ミュージアムWG(ワーキンググループ)を設置し、展示資料の絞り込みや規程作成など、ミュージアム実現に向けて検討を進めた。2023年には、文教大学ミュージアム規程を制定、2024年度より施行し、ミュージアム運営委員会にて、公開資料及びプラットフォームの検討を行い、ミュージアム構築業者も決定した。

【評価・次期に向けて】文教大学ミュージアムに係る組織体制を構築できたことにより、本事業が本格的に始動した。本学の認知度及び評価のさらなる向上を目指して、文教大学ミュージアムの具体的な活動を推進していきたい。

👤 A103 今後の学生募集対策の検討

志願者・入学者の安定的な確保を目標にオープンキャンパスを含めた広報活動の再構築(SNSの活用など)に取り組んだ。2022年度は予約型オープンキャンパスに来場できなかった受験生への対応として、越谷キャンパスで臨時オープンキャンパス(事務局の学生募集検討会を主体)を開催した。2023年度は、間伐材を利用したマグネットを高校訪問時に渡す取り組みなどを行った。さらに、①オープンキャンパス学生広報スタッフの募集と活動を開始②総合型選抜入試などの年内入試広報のための高校訪問などの実施③全国入試宇都宮会場の新設による高校訪問などを検討した。2024年には、①対象者を限定したミニオープンキャンパスを東京あだちキャンパスで開催(3月・12月)②高校教員対象の入試説明会を実施(オンラインにて同時配信)し、後日録画配信③名称変更を予定している情報学部データサイエンス学科のリーフレットとランディングページの作成④一般選抜出願者が多い高校を中心に約100校を訪問⑤新PRグッズとしてBUNKOアクリルキーホルダーを作成⑥2026年度入試概要を決定し、留学生入試の日本語能力要件及び帰国生入試の出願要件などの変更に取り組んだ。

【評価・次期に向けて】直接的な効果測定は困難であるが、2024年度オープンキャンパスにて、各キャンパスとも前年よりも多い来場者を得たことは、日頃の教職員による努力に加え、SNS広告による効果も大きいと思われる。改めて広報活動は継続することが重要である。

👤 A104 データ活用による入試戦略の構築

入試制度の見直しや新たなマーケットからの志願者を獲得するための入試方法の考案に取り組んだ。担当学長補佐を座長とするワーキンググループによる入試データなどの分析を行うとともに、新たな予約型奨学金制度の新設による併願策、追加合格・補欠合格方法、付属校生を対象とした特別入試の全学部実施について検討した。また、一般選抜における各入試区分の受験者数の経年変化を分析し、全国入試の2日間開催、英語外部試験活用入試についても検討した。2024年度入試において文学部B日程入試を新設した。さらに、2025年度入試においては文理2教科入試(文学部、健康栄養学部、経営学部)を新設し、英語外部検定試験の利用も開始した。

【評価・次期に向けて】入試の傾向として早期化が挙げられ、年内入試による入学者の確保が進んでいる。入試制度の見直しなどで入試データの活用は進んでいるが、改善の余地は残されている。入試改革を積極果敢に行っている私立大学もあり、本学として対抗策をどう打ち出すかが今後の鍵となる。

🇯🇵 A105 留年者数及び退学者数の抑制

留年者及び退学者を抑制するための学生支援体制の強化(各研究科・学部の成績不振者対応、担任制度、オフィスアワー、学生支援室、保健センターなど)や新たなサポート体制の構築に取り組んでいる。2022年度は、学生委員会・保健センター共催による学生支援に関するFD・SD研修会を開催し、2023年度は学生委員会内の作業部会(アクションプラン関連)において、新たなサポート体制の検討なども行った。

【評価・次期に向けて】留年者数及び退学者数は現状の30%減を達成指標として、新たなサポート体制の構築には至っていない。今後も継続して検討が必要である。

🇯🇵 A106 教育質保証の確立

教育質保証の確立を目指して、学習成果の可視化及び把握の方法を検討するとともに、効果的な授業形態・方法について、アクティブラーニング科目の充実、効果的な教育DX(デジタルトランスフォーメーション)の導入などの検討を行った。教育DXの推進という点では、BYOD(Bring Your Own Device)の導入を含めた検討を行い、2026年度からBYODを導入することを決定し、環境整備について最終調整を行っている。

【評価・次期に向けて】アクティブラーニング科目の充実と学習成果の可視化及び把握の方法の確立に向けては、さらに継続して多面的な検討が必要である。BYODの導入に関しては、ほぼ当初の目的は達成しているが、BYOD環境下での最適な授業の実施については検討が必要である。

🇯🇵 A107 IR(Institutional Research) 実施体制の確立

質の高い教育の実施に資するIR(Institutional Research)実施体制の確立を目指し、学内外データの収集方法やデータの一元的な管理・活用方法について検討を行っている。2022年度は、IRプログラム分析ツールに関してベンダーより情報収集を行った。そして、データ収集方法や分析方法も含めて、データ活用方法について検討を続けている。

【評価・次期に向けて】教育研究推進センターでIRデータの分析及び活用方法についてシミュレーションを行った。問題点として、入学から卒業までの各部署におけるデータの連結が困難であることが認められた。今後もデータの統一など、IR推進組織を設置した上で総合的な検討が必要である。



A108 外部資金獲得の支援体制の強化

補助金を含めた外部資金獲得のための支援体制の強化と研究推進に向けた体制整備を進め、ウェルネス&未病リサーチセンターを設置し、順調にスタートしている。まず、2022年度にウェルネス&未病リサーチセンター設置に向けた規程の整備に取り組み、2023年度に入り寄附募集を開始した。ウェルネス&未病リサーチセンター及び科学研究費の実績は以下の通りである。

2023年度〔寄附金3件4,050,000円／受託研究2件6,800,000円〕、2024年度〔共同研究1件2,500,000円〕。
 科研費採択実績(研究代表者)は、2021年度〔応募28件／採択7件・採択率25.0%〕、2022年度〔応募30件／採択8件・採択率26.7%〕、2023年度〔応募30件／採択7件・採択率23.3%〕、2024年度〔応募36件／採択10件・採択率27.8%〕

【評価・次期に向けて】 外部資金の獲得状況については、外部資金獲得件数や科研費採択率は安定的であるものの、目標の数値には達していない。ウェルネス&未病リサーチセンターの設置により、新たな外部資金獲得手段が開拓できたので、さらなる充実を図りつつ、外部資金獲得に関する各種規程の整備及び改定を進める必要がある。

A109 大学院の充実

教員の研究成果の公開体制の充実、大学院の認知度の向上を目指して新たな取り組みを行っている。2024年度には研究成果を学内外に広く公開するため、オープンアクセス方針を策定した。そして、本学の各学部から大学院への学内入学選考の対象学部拡大を検討し、2026年度入試より全研究科で実施することとなった。

【評価・次期に向けて】 各研究科において志願者の回復傾向がみられ、とくに教育学研究科で顕著であった。さらに外国人留学生別科からの大学院進学への推進、留学生の志願者増などの検討も必要である。

A110 学部・研究科の枠を超えた研究の支援

2023年度にウェルネス&未病リサーチセンターを設置し、学部の枠を超えた共同研究及び受託研究を行っている。
 ※ウェルネス&未病リサーチセンターの実績は(A108)参照

【評価・次期に向けて】 学内の教育研究予算を利用した研究支援制度の創設には至っていないが、ウェルネス&未病リサーチセンターの委託研究及び共同研究として、学部横断型の研究が行われている。ウェルネス&未病リサーチセンターの活動を通して、学部・研究科の枠を超えた研究のさらなる充実を図ることが必要である。また、学内の教育研究予算を利用した研究支援制度の創設を進めることも課題である。

A111 新たな奨学金制度の創設の検討

スカラシップ入試制度の構築と全国入試成績優秀者特待生制度の見直しを図るために、新たな予約型奨学金新設のための検討を行った。2025年度入試より全国入試成績優秀者特待生制度を廃止し、全国入試成績優秀者特待生制度に代わる新たな制度を検討している。

【評価・次期に向けて】 スカラシップ入試制度の検討は、これから本格的にスタートしていく段階である。スカラシップ入試は年内に実施し、一般選抜入試と連携させ入学者を確保することが大切である。スカラシップ入試受験者への優遇措置を検討する。スカラシップ入試の活用を多面的にとらえ、高大連携にもつなげていきたいと考えている。

A112 キャンパスの活性化

産学共同事業の推進、外部からの研究費や寄附金の獲得に向けて取り組んでいる。2022年度は、ウェルネス&未病リサーチセンター設置に向けた規程を整備し、2023年度に寄附募集を開始している。また、地域連携活動の一環として、東武健康ハイキングにおける足立区内でのハイキングコースの企画運営(東武鉄道・足立区と本学学生が連携)、足立成和信用金庫との連携事業「はなはな文芸マルシェ」(地域住民、地域事業者、地域の団体も協力)などにも取り組んだ。

※ウェルネス&未病リサーチセンターの実績は(A108)参照

【評価・次期に向けて】 本事業は順調に推移している。各キャンパスの活性化と連携については、2025年度から開始されるキャンパス新構想の推移を視野に入れながら、継続的に検討していく。

A113 3キャンパス間の連携

キャンパスを超えた課外活動の合同実施を実現した。部活動などの交流活動状況について関係部署にヒアリングを実施し、キャンパス間連携の可能性について検討を行った。越谷キャンパスで毎年開催している音楽祭「S-1グランプリ」では、2022年度より、湘南・東京あだちキャンパスの学生も参加し、キャンパスを超えた交流の機会となっている。

「S-1グランプリ」の実績(参加者/来場者)は以下の通り。2022年度〔170名(30団体)／230名〕、2023年度〔183名(41団体)／320名〕、2024年度〔164名(30団体)／244名〕

【評価・次期に向けて】 本事業は順調に推移しており、とくに各キャンパスの連携については、(A112)同様に2025年度からスタートするキャンパス新構想の推移を視野に入れながら、継続的に検討する必要がある。

A114 キャリア支援のさらなる充実

希望する進路先への決定率の向上を目指して多角的に取り組んでいる。具体策としては、①越谷キャンパス:キャリア支援課に教職専門のアドバイザーを配置し、書類添削や面接練習など相談受付体制を強化②東京あだちキャンパス:株式会社ANA総合研究所産学連携提供プログラム「エアライン特別コース」を有料講座として実施③「面接対策合宿(2日間通い)」の実施人数を100名から120名に拡大し、企業就職採用試験対策を強化④教員採用試験の早期化・複線化に対し、自治体によって対応が異なる中で対策講座の実施時期を3年次から2年次に変更するなど柔軟に対応⑤教職支援連携センター教員就職支援部門において、学生の主体的な学び合いを意図した教員採用試験準備対策セミナーを開始。また、特務教員による学生相談対応を3キャンパスで実施した。

【評価・次期に向けて】 教職支援連携センターを設置したことにより、教員就職支援の充実を図っている。進路決定満足度も「学生生活調査(卒業時アンケート)」の回答からは年度による有意な差は見受けられないが、相対的に満足度は高い水準で安定している。しかし、今後も様々な社会状況の変化に対応した継続的な就職支援が必要である。



A115 付属学校との関係性強化

総合学園としての発展を念頭に、『人間愛』理念の浸透に努め、教育課程の接続や付属学校と連携したプログラムの充実に取り組んでいる。とくに学びの交流祭を通して、付属各校との連携強化を図ることができた。2022年度は、大学と付属各校(高校、中学校、小学校、幼稚園)が学びの交流祭実施に向け、意見交換を行った。また、付属高校で実施された大学体験授業へ講師の派遣にも取り組んだ。2023年度は、付属高校との連絡会を開催し、入試結果及び在学生の状況などの報告と新入試の説明を行った他、付属幼稚園での長期休業期間の預かり保育へ学生ボランティアを派遣した。学びの交流祭においては、大学体験授業及び保護者講演会への講師派遣の他、大学生による部活指導、大学生との交流会を実施した。2024年度は、付属高校との意見交換会をはじめ、大学体験授業への講師派遣などを行った。また、付属中学校・高校の探究活動に対し、該当研究分野の大学教員から助言を行った。なお、2025年度入学生より付属高校出身者の入学金減額が決定した。

【評価・次期に向けて】 2025年度からは付属高校出身者の入学金減額を行うため、付属校との高大接続強化の一助となることを期待される。また、付属幼稚園の長期休業期間の預かり保育は、保育士を目指す学生にとって、実習以外で保育の現場を体験しながら職業観や使命感を培うことができる貴重な機会となっており、今後も継続して取り組んでいきたい。学びの交流祭の充実を含めて継続的な付属学校との連携が必要である。

A116 社会連携活動の強化

(1) 他大学との連携の促進(オンラインなどの活用)
 東京あだちキャンパスでは、足立区内6大学学長会議(2022年度)での議論を起点に行われた「地域と大学間の交流イベント(対面形式)」や「区内大学大学祭実行委員の情報交換・交流会」、「あだち未来スケッチ」へ本学学生が参加し成果を残した。また、名城大学(沖縄県)との単位互換協定による特別聴講生の受け入れ・送り出しも行われた。越谷キャンパスでは、越谷市と連携会議において市内の官学連携活動について確認、情報交換などを行い、湘南キャンパスでは、藤沢市第16回地球温暖化対策に関する大学生との意見交換会には、他大学とともに本学学生が参加した。

(2) 組織的な各種ボランティア活動の展開
 地域連携課において関係課からのヒアリングなどを行い、学生へ地域のボランティア情報配信体制について検証・検討したほか、日本財団ボランティアセンターと協定を締結し組織的な学生支援体制の整備を行った。具体的なボランティア活動例としては、①東京あだちキャンパス周辺の清掃活動②東武健康ハイキングの企画運営ボランティア③足立成和信用金庫が行う「あだち菓子博2023」④足立区桜花亭で行われた「花畑ガイドウォーク」⑤茅ヶ崎市浄見寺地元まつり⑥茅ヶ崎市小出コミュニティセンター「コミセンまつり」の運営などが挙げられる。

【評価・次期に向けて】 (1) 着実に連携を進めており、それぞれの取り組みについては継続性があり、その中から学生間の交流へと発展した連携活動も生じている。(2) コロナ禍が過ぎ、ボランティアの依頼は増えており、実際に参加している学生も多い。一方で、現在の情報提供の方法では、実際の参加学生数の把握は困難な状況にあるため、情報の管理方法を検討する必要がある。なお、「地域の活性化」をテーマに取り組む案件は、ゼミナールの研究材料として取り扱われるケースが多く、積極的に地域の問題解決に参加している学生も多い。

A117 高校との連携強化(高大連携)

教育課程の接続の実施、高大連携による教育活動の推進を目指している。2022年度は、新たに葛飾総合高校と経営学部間での連携協定を締結した。2023年度には、地域連携センターにおいて高大連携活動方針を決定した。2024年度には、①都立篠崎高校「探究学習」の時間に、文学部教員を派遣②千葉県立我孫子高校・教員基礎コース集中講座に経営学部教員を派遣③神奈川県立鶴嶺高校「探究学習」の時間に、国際学部教員を派遣④埼玉県高等学校進路指導研究会との連携により、教育学部、人間科学部、文学部、国際学部、経営学部の授業に埼玉県内高校生の受け入れや健康栄養学部の模擬授業の実施などに取り組んだ。

【評価・次期に向けて】 地域連携センターの高大連携活動方針について、明確に定めた。なお、学生募集・入試広報に関わる高大連携事業については、入学センターとの連携を強化して、入学者の増加につなげる。

A118 学生の留学支援体制の充実

(1) オンラインによる海外研修などプログラムの開発
 2022年度に文学部外国語学科のオンラインプログラムに新たな提携先を追加した。2023年度には新たに3つのオンライン研修が企画され、そのうち1つの研修が実施された。文学部外国語学科短期留学については、2022年度に実施したオンラインプログラムのうち特に評価の高かったオンライン研修に厳選して行った。2024年度は4つのオンライン海外研修を企画した。実績は以下の通りである。

2021年度〔オンライン海外研修7件(58名)／オンライン短期留学1件(64名)〕、2022年度〔オンライン海外研修6件(35名)〕、2023年度〔オンライン海外研修2件(6名)／オンライン短期留学1件(11名)〕、2024年度〔オンライン海外研修3件(10名)／オンライン短期留学1件(4名)〕

(2) オンラインによる海外研修プログラムなどの体制整備
 2021年度に制定した「オンラインによる海外研修プログラムなどの実施にかかるガイドライン」に基づき、2023年度にはプログラムの企画・運営が行われた。必要に応じて見直しを行う体制となっているが、2024年度は不具合などもなく順調に運用されている。

【評価・次期に向けて】 目標は達成しているが、必要に応じて、ガイドライン内容の強化見直し、更新、学内周知を図っていく。

A119 外国人留学生の受け入れ体制の充実

(1) 留学生と日本人学生・教職員、留学生間の交流機会の充実や促進
 在学生の海外留学支援を強化するための国際交流アンバサダー制度を運用し、活動をさらに充実させている。2023年度は、海外留学希望者の数が増え、国際交流アンバサダーの活動もより一層活発になり、本学国際交流プログラムと紐づいたイベントが開催された。また、アンバサダーが交流できるGoogle Space(チャット機能)を設け、キャンパス間での連携を強化した。コロナ禍を経て、本学ではじめてとなる3キャンパス合同「留学生研修旅行」(留学生、交換留学生、日本人チューター、教職員参加)を企画・実施した。加えて、キャンパスごとに、日本人学生、教職員、留学生が交流できるイベント「留学生の集い」を行った。2024年度にも、留学生委員会の研修旅行及び留学生の集いを実施した。引き続き、別科行事、国際交流アンバサダーの国際交流フェア、留学生委員会の留学生の集い、研修旅行などを通して、交流できる機会を継続していく方向である。

(2) 学部を超えた交換留学生の受け入れ体制の整備
 留学生委員会主催の「留学生研修旅行」では、3キャンパスの日本人チューター、本学留学生及び交換留学生が学部を超えた交流を行った。また、交換留学生が所属学部以外の授業(2023年度は教育学部の授業)を聴講できるように運用しており、今後も交換留学生の学内での交流を継続させる必要がある。

(3) 別科、学部・研究科との連携強化
 外国人留学生別科において、1年コースに加え、1年6カ月コースを新設し、学部・研究科に4月から進学できるように対応した。学部及び研究科に進学できるだけの日本語能力のさらなる向上を図っており、日本語レベル別科目の充実を目的として、2025年度カリキュラムの改定及び文教大学外国人留学生別科規程改正を決定した。

【評価・次期に向けて】 (1) 計画したイベントと研修は順調に推移しているが、さらなる充実が必要である。(2) コロナ禍の影響で実施が遅れているが、回復傾向にある。(3) 外国人留学生別科の志願者と留学生別科から学部及び大学院への進学者を増加させる必要がある。





『人間愛』の精神で世界標準の社会貢献を

文教大学付属 中学校・高等学校

時代を超えて変わらない『人間愛』の精神のもと生徒を育成するための
様々な教育施策を実施し新しい教育のかたちに挑み続けています

4年後の目標

『人間愛』の精神を育み、グローバルな社会・
ボーダレスな社会で活躍できる人間の育成

達成指標

生徒・保護者の本校への入学満足度90%の達成
難関大学合格者130人以上の達成

具体的な取り組み

募集・広報 | 入学者の質と量の確保

B101 募集広報活動の強化 ▶ p.10

- [広報]
 - 戦略的な広報活動の実施
 - 中学入試は、塾・保護者へのPRを重視
 - 高校入試は、中学校・生徒へのPRを重視
 - ホームページ・Instagramの有効活用
 - 本校の強みの効果的発信
- [募集]
 - 入試制度の工夫改善
 - 生徒募集活動の推進

達成度 **90%**

教育 | 生徒の学力向上

B102 ICTを活用した効果的な授業の実施 ▶ p.10

- 授業にICTを積極的に活用した、効率的でわかりやすい授業の実施

達成度 **80%**

B103 グローバルコンピテンスプログラムの導入 ▶ p.10

- グローバル社会で活躍する生徒の育成を目指したグローバルコンピテンスプログラムの新規実施

達成度 **70%**

B104 模試偏差値の向上 ▶ p.10

- 新教育課程の適切な実施
- 授業での基礎基本の徹底・休業中の講習・Bステーションの有効活用

達成度 **70%**

B105 各種検定の取得の推進 ▶ p.10

- 校内での英語検定・数学検定・漢字検定の運営実施・取得推進

達成度 **70%**

研究 | 教員の指導力向上

B106 校内研修の充実 ▶ p.11

- 教員の授業力・生徒指導力の向上のため、研究授業や生徒理解研修の実施

達成度 **100%**

B107 外部への研修の積極的参加 ▶ p.11

- 外部団体主催の研修会への積極的な参加

達成度 **80%**

生徒生活 | 礼儀と規律ある生徒の育成

B108 挨拶・言葉遣い、マナーの育成 ▶ p.11

- 全教育活動を通じて、日常的な挨拶・言葉遣いの指導、登下校のマナーなど、社会人としてのマナーの育成

達成度 **100%**

B109 基本的な生活習慣の確立 ▶ p.11

- 時間厳守を身につけること、規則正しい生活習慣の育成

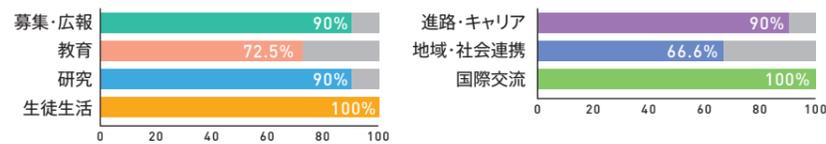
達成度 **100%**

B110 心を育てる学校行事の実施 ▶ p.11

- 学校行事を通じて、すべての人を尊重してあたたかく慈しみ、やさしく思いやる心の育成

達成度 **100%**

カテゴリ別達成度



進路・キャリア | さらなる進学実績の向上

B111 「文教キャリア教育プログラム」の実施 ▶ p.11

- 「ENAGEED」のコンテンツを活用し、常に学び続け活躍することのできる人材の育成

達成度 **90%**

B112 進路行事・キャリアガイダンスの強化・大学との連携 ▶ p.11

- 進路行事やキャリアガイダンスの実施により、進路実現へのモチベーションと達成のための方策の確立
- 文教大学との連携(大学体験授業)

達成度 **90%**

B113 難関校合格者数の向上 ▶ p.12

- 生徒記録(生徒カルテ)に基づく、継続的な進学指導の強化
- キャリア支援部・学習支援部の重点施策を計画実施

達成度 **90%**

地域・社会連携 | 『人間愛』の精神の育成

B114 生徒の自治的生徒会活動の推進 ▶ p.12

- 白百合会支援部による、生徒自治活動の推進

達成度 **100%**

B115 『人間愛』精神の育成 ▶ p.12

- ホームルーム・道徳・学校行事・探究学習などを通じて、『人間愛』の精神を大切にする心の育成

達成度 **50%**

B116 ボランティア活動の奨励 ▶ p.12

- ボランティア活動の奨励による、社会に貢献する精神の育成

達成度 **50%**

国際交流 | 海外研修プログラムの推進

B117 留学・語学研修プログラムの継続と新規開拓 ▶ p.12

- オーストラリア留学・セブ語学研修の継続と、カナダ留学プログラムの新規開拓
- 海外大学進学協定校推薦制度(UPAS)に加盟し、海外大学への進学ルートの拡大

達成度 **100%**

B118 希望者によるオンライン外国語講座の実施 ▶ p.12

- 台湾の大学進学のための華語講座・オンライン英会話の実施

達成度 **100%**

※達成度のパーセント表記について 各施策項目で検討した目標に向けた取り組みや数値などに対する達成度合いを以下の達成指標をもとに示したものです。(2025年3月現在)
〔達成指標〕100%:プログラムの開始、制度の創設、組織の設置、施設の完成など、計画のすべてを達成/80%:プログラム、制度、組織、施設などの具体的計画を実行中/60%:実施計画を策定/40%:案策定/20%:構想段階

主な実施状況

B101 募集広報活動の強化

入試広報計画を作成し、戦略的な広報活動を実施している。とくに中学入試は塾・保護者へのPRを、高校入試は中学校・生徒へのPRを重視して行った。また、ホームページ・Instagramの有効活用として、2022年4月より適宜更新を開始し、ホームページ内に広報イベントの周知申し込みを集約。本校の強みの効果的発信に努めている。一方募集活動としては、入試制度の工夫・改善を行い、生徒募集活動の推進を図った。具体的には、塾・公立中学校への訪問や入試要項の周知、新たな帰国生募集要項に基づくPR活動などに取り組んだ。説明会の来校者数(中学校/高校)は、2022年度[842名/829名]、2023年度[659名/867名]、2024年度[578名/775名]、2025年度[835名/746名]。志願者数(中学校/高校)は、2022年度[1,556名/642名]、2023年度[1,492名/548名]、2024年度[1,422名/547名]、2025年度[1,894名/475名]。*オンライン説明会参加者数を含む

【評価・次期に向けて】戦略的な広報活動を継続することが、説明会来校者数と志願者数の確保につながっている。達成指標(説明会来校者数:中学校800名/高校:900名 志願者数:中学校1,500名/高校400名)に届くようになり、本校の教育内容と環境、進路実績を広報することでとくに中学校の入学者数は定員を満たし続けている。社会情勢と入試動向を踏まえ、様々な媒体を活用して戦略的に柔軟な広報活動を継続的に実施し、公立中学校や塾への訪問、校外での学校説明会において成果を上げている。また、入試制度においては、学力別の3つのクラス分けを定めたことが学力上位層の志願者増につながっている。魅力ある教育内容と環境、そして個々に最適な進路実現と実績を備えることで、本校を第一志望とする生徒の増加を目指したい。帰国生入試においては、帰国生に対する認知度が低いことなどで志願者には変化は見られないが、多角的な視点や考え方をもち帰国生の入学者を増やし、校内の活性化を図ることも急務である。

B102 ICTを活用した効果的な授業の実施

ICTを積極的に活用した、効率的でわかりやすい授業の実施に取り組んでいる。具体的には、新規採用教員・非常勤講師へのICT機器の使用ガイダンスの実施や教科内でICT活用方法の共有、ICT支援員による機器の活用支援、ICT活用をテーマにした研究授業などを実施してスキルアップを図り、授業に反映させることができている。

【評価・次期に向けて】各教科で授業や予習復習のためにICT機器を活用することで、生徒の理解力を高めたり、授業の効率化につなげたりすることができるようになり、学習意欲と学力の向上の一助となっている。生徒はICTを活用して発表及び表現スキルを伸ばしたり、AIを利用して英語力を向上させたりしている。今後も各教科でICT機器やAIを活用することで、生徒の学習の個別最適化によって理解力を高めるなどしたい。引き続き教員のICT活用指導力と意識の向上を行い、情報技術の発展に合わせて、教員が先導者として学校全体で最新のICT活用とAI活用のスキルを養い続けたい。



B103 グローバルコンピテンスプログラムの導入

グローバル社会で活躍する生徒の育成を目指してグローバルコンピテンスプログラムを教育課程に組み入れて開始した。現在も計画に見直しを加えながら、継続して実施中である。グローバルコンピテンスプログラムで育む「世界標準のものの考え方や視点」によって、新たなマインドセットを獲得し、探究学習や留学、希望進路選択肢の拡大、希望進路に必要な科目や英語検定などの検定試験に向けての学習意欲の向上につなげる生徒が増えている。

【評価・次期に向けて】グローバルコンピテンスプログラムにより新たなマインドセットを獲得し、探究学習や留学、希望進路選択肢の拡大、学習意欲の向上につなげた実例を生徒や外部へ発信していく。また、プログラムは中1から高1までの4年間の期間とし、高2での希望進路決定への礎とする。2025年度からは、中高ともにネイティブ講師と担任教員とでプログラムを進めることで、教員間の意識の差を解消するとともに日常的に生徒へプログラム内容を浸透させ、グローバル社会へのマインド醸成につなげられるように発展させていきたい。

B104 模試偏差値の向上

2022年4月より新教育課程を実施している。そして、授業での基礎・基本の徹底、休業中の講習、Bステーションの有効活用にも努めている。2024年4月には、中1から新規に私学テストを導入し、Bステーションの活用計画を改善して実施している。この中学校での学力向上に向けて外部試験の活用を見直し、試験への意識向上と取り組み方の個別最適化を目指している。私学テストによって、生徒が授業で培った学力を主体的に高めて身につけていくよう支援している。高2の段階で受験校を明確化する生徒が増えたこともあり、高2後期の学力試験や模試において個別に必要な受験科目のみ受けられるように変更した結果、模試を受験に向けての目標に設定して学習できる生徒が学力を向上させている。

【評価・次期に向けて】中高ともに外部試験を活用して、主体的な学習への取り組みと学力向上につなげられるように運用する必要がある。中学校では、私学テストを3年間活用することによって、主体的で個別最適な学習への取り組みと学力2極化の解消につなげる。高校では、3年間の外部試験のスケジュールで学習を継続していくことが進路実績にも結びついているため、より具体的に個別最適な指標を高1から適宜提示して学習に取り組みせたい。とくに高2と高3は、外部試験への取り組みと試験結果が学習と進路選択の指針となるが、外部試験以外の指標が必要な生徒も一定数存在するため、検討を進める必要がある。

B105 各種検定の取得の推進

検定実施計画の作成・修正、前田学術奨励金の周知と取りまとめなどを行い、校内での英語検定・数学検定・漢字検定の運営実施・取得を推進している。外部会場も含めて、年間で英語検定3回、数学検定3回、漢字検定1回を学校で取りまとめている。英語検定は、大学受験や留学において有効活用できるため受験者が増加しており、教員やET、Bステーションの協力体制を得ながら合格者数増加につなげている。中学校では漢字検定にも対応できる朝テストを毎週実施し、語彙力の向上を図っている。

【評価・次期に向けて】数学検定は年3回すべて本校で実施できたが、英語検定と漢字検定はすべてを実施することができなかった。中学校では、3つの検定を学習目標として学習習慣を定着させることが有効である。また中高ともに英語検定対策の担当部署を新たに設けたり、Bステーションによる年間対策講座を実施したりと支援を強化して、高校卒業までに学年の半数は英検2級以上の合格者となることを目指したい。

B106 校内研修の充実

教員の授業力・生徒指導力の向上のため、研究授業や生徒理解研修を実施している。具体的には、生徒指導力と生徒理解向上を目的とした教員研修1日(4講座)、校内授業研究1回を毎年行っている。学校説明会や授業参観などを含めて年間7回以上、外部への授業公開を実施していることや、廊下から教室内が見渡せるオープンな環境の下で、教員は常に高い意識をもって授業を展開している。また、授業力向上のため、教科会で定期的に授業スキルを共有したり、同じ授業の担当者同士で綿密に授業計画を練ったりするなどの協働体制を構築している。研究授業では、全教科共通のテーマについて各教科で議論することを通して全教員が研鑽に努めている。

【評価・次期に向けて】本校の教員は、校内外に開かれた授業を行っているというプロ意識をもち、魅力ある授業を毎時間展開できるよう努めている。そのため、全教員が各学期に1回は教科内外の教員などと授業についての助言や質疑応答を行って各自の授業スキルアップを図ることが必要である。また、研究授業では文教大学や中高大連携校からの先生方にもお越しいただき、議論を通して授業力向上に結びつけることで、教科全体の授業力の安定化と教科指導の均質化につなげたい。全教員が生徒の個別最適な進路を実現できる学力を身につけられるように、教科ごとに学習到達度を明確にして共通の指針をもとに授業改善を組織的に推進していきたい。

B107 外部への研修の積極的参加

外部団体主催の研修会(教務研修会、災害安全研修会、ICT研修会など)への積極的な参加を推進している。各部署の代表教員が教務や安全、学習指導、進路指導、生徒指導、ICTなどの研修会に参加して、研修内容を各部署で活用したり、教員全体に共有したりと校内のアップデートに努めている。

【評価・次期に向けて】探究学習や生成AI関連、先進的な取り組みの研修会への参加と学びを推進する必要がある。また、海外研修に計画的に参加することで、本校の留学制度、修学旅行のあり方と、世界の教育事情を現地で見聞き、本校のグローバル教育の推進への寄与につなげていきたい。

B108 挨拶・言葉遣い、マナーの育成

すべての教育活動を通して、日常的な挨拶や言葉遣いの指導、登下校時の言動など、社会人としてのマナーの育成に努めている。具体的には、全校放送朝礼での校長の訓話、担任や授業担当による「挨拶や言葉遣い、マナー」に関する指導を適宜行うことで、生徒のマナー向上につなげている。毎週1日は生徒会が全校放送朝礼を担当し、生徒視点での校内外のマナーやモラルアップの啓蒙活動も行っている。

【評価・次期に向けて】全校放送朝礼での校長の訓話、担任や授業担当による「挨拶や言葉遣い、マナー」に関する指導と生徒会からの啓蒙活動を適宜行うことで、生徒同士でマナー向上を主体的に目指せるよう支援する。また、校内外で登下校時のマナー指導を定期的に行い、社会の一員として周囲への配慮ある言動を養っていく。さらに、近隣校との学校間連携の一つとして、旗の台駅近くの通学路で両校の生徒会による登校時の挨拶運動を定期的に実施し、地域への貢献にもつなげていきたい。

B109 基本的生活習慣の確立

時間厳守を身につけることや規則正しい生活習慣の育成について、全校放送朝礼での全体への指導と学級指導と徹底を図っている。自主的に時間を守る生徒は、学習の計画立案と実行もスムーズに行うことができることもあり、学年、学級、個別で時間を守ることからはじまる基本的生活習慣を身につけるべく、適宜指導を行っているため、中高ともに出席状況は良好である。

【評価・次期に向けて】とくに中1及び高1の学年に対しては、基本的生活習慣の基盤である時間厳守を徹底して身につけるために、学年や学級、個別など適宜指導する必要がある。時間管理能力を養うことが学校生活や学習の習慣の確立への基盤となり、各自の目標達成や進路実現に結びつくことを、本校卒業生の実例なども紹介しながら各生徒の主体的な実践につなげていきたい。



B110 心を育てる学校行事の実施

学校行事を通して、すべての人を尊重してあたたかく慈しみ、やさしく思いやる心の育成を目指している。教員間でこの基本方針の周知と徹底に努め、計画の見直しを加えながら継続実施している。達成指標は、学校行事においてPDCA(計画・実行・評価・改善)を適正に実施しながら、生徒の行事満足度を90%以上とすることである。実際に全校生徒に対するアンケートにおいても、行事満足度は毎年90%に近い数値となっており、生徒の思いを汲んだ企画運営ができてきている。

【評価・次期に向けて】学校行事を通して、生徒が協働及び共感を体験したり、建設的な人間関係を築く上で相互理解に努めたりして非日常的な団結力と達成感を味わうことができるように、個々の生徒の実態把握と適切な支援が必要である。そのため、全校生徒に対するアンケートを適宜行い、実行委員が中心となって全校生徒の意見を基に議論し、見直しを含めて企画運営に取り組むことを支援したい。また、中高6年間で地域から世界まで心と視野を広げる目的で、校外活動及び修学旅行、海外研修のプログラムを構築していきたい。

B111 「文教キャリア教育プログラム」の実施

「NEWTON」から「ENAGEED」のコンテンツに内容を変更することで、中高6年間の探究学習を中核とするキャリア教育プログラムを刷新し、常に学び続け活躍することのできる人材の育成に努めている。中1から高2まで個人もしくはグループで、課題設定から解決案の策定まで探究を進め、探究祭では全員が発表を行っている。一方、中3から高2のCC(探究学習)は、適切なテーマ設定と探究プロセスにおいて学内外のサポートや連携を広げている。

【評価・次期に向けて】「ENAGEED」のコンテンツの活用方法を適宜見直しながら、中高6年間の探究学習を中核とする最適なキャリア支援を継続する。とくに中3から高2のCC(探究学習)では、文教大学などの先生方のサポートも得ながら適切なテーマ設定と探究プロセスで各生徒の将来につながる探究活動に取り組み、さらに他大学との中高大連携を進める中で、探究学習からその後の進路選択につなげたい。また中1と中2の探究学習のテーマ設定を広げ、学校行事に連動して学びを深めるとともに一貫性をもたせていきたい。

B112 進路行事・キャリアガイダンスの強化・大学との連携

進路行事やキャリアガイダンスの実施により、進路実現へのモチベーションと達成のための方策の確立を目指している。文教キャリア教育プログラムに基づく大学体験授業においては、文教大学及び他大学約20校の体験授業を実施することで、個々の志望に応じた進路選択と大学進学への意識向上につなげている。また、本校卒業生や他校出身の大学生による進路体験交流会では、生徒や保護者が受験までの学習方法について理解を深めたり、生徒の学習意欲向上に役立てたりと、貴重な機会になっている。なお、中高大連携を進める中で、連携校からの支援を本校生徒が享受するため、文理すべての学部を網羅できるように動いている。

【評価・次期に向けて】中高大連携の拡充を進め、連携校での見学や体験学習、幅広い学問分野からの生徒及び保護者対象の講演会などの実施を計画している。また、生徒のニーズに応じた大学学部学科の現役大学生を呼べるように、本校卒業生のさらなる進学実績向上と卒業生との結びつきの強化を図りたい。

B113 難関校合格者数の向上

生徒記録(生徒カルテ)に基づく、継続的な進学指導の強化とキャリア支援部及び学習支援部の重点施策を計画に基づき実施している。具体的には、全教員対象の進学指導についての研修会を行い、中高各学年で必要な学習進路支援について情報共有と実践に取り組んでいる。とくに2025年度から新たな入試方式へ移行するため、今後数年間は高3担当教員を中心に入試情報の共有を徹底し、生徒への受験指導に万全を期す必要がある。また、大学入学共通テスト受験を希望者のみとし、生徒が第一志望校合格に向けた学習に注力できるように変更した。校内進学指導研究会では、生徒記録に基づいて個々に適切な受験校の検討を行い、生徒が最適な進路選択を成し遂げられるように支援することで、進路実績にも結びつけている。

【評価・次期に向けて】全教員対象の進学指導についての研修会を適宜実施して、中高各学年及び各教科に必要な学習進路指導について情報共有と実践に取り組む必要がある。新たな入試方式に対応し、高3進路指導の要となる複数の教員を高3の学年に固定化して、生徒への受験指導に万全を期し、進路支援を全教員で協力できる体制を継続実施していきたい。

B114 生徒の自治的生徒会活動の推進

白百合支援部による、生徒自治活動の支援及び推進を図りつつも、生徒会の主体的な活動を第一に考えている。三大行事の体育祭、文化祭、合唱コンクールは、生徒会や実行委員会が中心となって全校生徒が共感できる行事となるように企画運営を行い、取り組み方や内容が年々向上している。取り組み時期を早めて企画検討する時間を増やしているが、実行委員会の組織のあり方や取り組み期間については引き続き検討を続けている。また、校則や生徒指導に関して、生徒会は学校生活向上の観点で生徒間から出た要望を汲み取り、「検討委員会」への問題提起を行って教員と議論することも経験している。

【評価・次期に向けて】三大行事の企画運営を学校全体の活性化につなげ、行事終了後すぐに次年度の実行委員会を立ち上げ、準備に1年間かけて取り組む行事としたい。なお、校則や生徒指導に関しては、「検討委員会」への問題提起と校則の継続的な再確認を行って教員との議論を重ねていくことが決まっているため、実践していきたい。

B115 『人間愛』精神の育成

ホームルーム・道徳・学校行事・探究学習を通じて、『人間愛』の精神を大切に育むことをベースに、教育活動や自主学習を進めている。2024年度の本校の創立記念日には、全校放送朝礼にて校長がスライドを用いて創立者の思いや人柄、『人間愛』とともに歩んだ歴史を説明し、学園歴史漫画を全校生徒に配布した。『人間愛』の精神の現れを、他者との協働や全体への貢献として理解できるように、自分の役割について責任を果たしたり、誰かの役に立つことを行ったりする生徒の言動を評価し、全体に推奨することもできるようになっている。また、主体的な活動が増えるに連れて、他者や全体に貢献する言動も多々みられるようになった。

【評価・次期に向けて】『人間愛』につながる生徒の言動を評価し、全体に推奨することを続けていきたい。今後も主体的な活動が増え、他者や全体に貢献する言動が自然と生まれ出るようになることを期待している。また、教員が『人間愛』の精神を基盤とする「相手を信じ、尊重し、優しく思いやる」言動を自然に行う姿をみて、生徒が様々な場面で自分の言動に生かせるようにしていきたい。



B116 ボランティア活動の奨励

ボランティア活動を奨励し、社会に貢献する精神の育成を目指している。学校から紹介しているボランティア活動には、すべて募集人数を超える応募があった。2024年度からは品川区社会福祉協議会との連携をはじめ、募金活動に取り組むなどボランティア活動の幅を広げている。コロナ禍を経て、ボランティア活動については個々の主体性に任せ、学校からの紹介は学園内や学校近隣の活動及び進路に関わる活動に限定するようにしている。

【評価・次期に向けて】学校や生徒組織からのボランティア活動の紹介は、学園内や学校、近隣の活動及び進路に関わる活動範囲から地球規模まで広げていきたい。また、全校生徒のボランティア活動参加についての現状把握を定期的に行い、学校全体で情報を共有してボランティア活動を推奨する必要がある。

B117 留学・語学研修プログラムの継続と新規開拓

オーストラリア留学及びセブ語学研修の継続と、カナダ留学プログラムの新規開拓、そして海外大学進学協定校推薦制度(LUPAS)に加盟し、海外大学への進学ルートの拡大に取り組んでいる。海外留学及び語学研修へは年間80人以上が参加し、オーストラリアの短期語学研修においては人気が高く毎年定員を満了し、カナダやオーストラリアの中長期留学も需要及び評価が高い。国内だけではなく海外への進路選択幅がある強みを生かして、語学研修や海外留学のコンテンツを精選し最適なプログラムを実施している。各説明会に数多くの生徒や保護者が参加することからも、留学などへの関心と期待感が高いことがうかがえる。

【評価・次期に向けて】留学と語学研修のプログラムを企画運営するにあたって、海外との交渉や引率などが可能な教員の育成を強化したい。また、国内及び海外への進路選択幅があることを広報し、留学と語学研修のコンテンツを引き続き精選した上で生徒へ提供したい。なお、中高の修学旅行先を海外とする企画の検討も進めている。

B118 希望者によるオンライン外国語講座の実施

台湾の大学進学のための華語講座をオンラインで実施している。2025年1月には、台湾の大学進学への一助として、台湾の私立12大学との連携協定を結んだ。華語講座の受講者及び台湾の大学への進学人数は毎年10名前後を維持しているため、今後も生徒にとって魅力あるコンテンツとして有効活用していきたい。また、オンライン英会話の代わりに、スピーキングや英作文のAIによる評価及び添削が可能なアプリも導入して実践している。

【評価・次期に向けて】華語講座を経て台湾の大学を卒業した生徒たちの現在の活躍を広報し、さらなる受講者と大学進学者の増加につなげたい。スピーキングや英作文のAIによる評価及び添削が、どのような成果につながっているのかを定期的に検証して有効に活用していきたい。





「学びを創る学校」を目指して 文教大学付属小学校

「ほがらかに たくしく きよく あたたかく」の校訓のもと
豊かな心と確かな学びを得られる教育を通して
子どもたち一人ひとりの可能性を引き出し、そして伸ばします

4年後の目標

「ふるさとのような学校」において
世界に羽ばたく国際人の育成

達成指標

倍率3倍以上の安定した志願者の確保
在校生並びに保護者の満足度90%以上の達成

具体的な取り組み

募集・広報 | 倍率3倍以上の安定した志願者の確保

C101 顕在層(学校説明会や幼児教室訪問で出会う層)からの志願者の拡大 ▶p.14

- 幼児教室への訪問の拡大 ○在校児童の活動を反映した動画の工夫
- 在校児童と来校未就学児との触れあいの場の設定
- 5回の学校説明会における、それぞれに特色をもたせた内容の工夫
- 幼児教室における本校単独説明会を実施



C102 潜在層(受験しようか迷っている層・受験は考えていないが私立小学校に入れることが可能な層)からの志願者の拡大 ▶p.14

- 幼稚園、保育園訪問の拡大 ○受験雑誌への出稿
- 書店売り冊子への出稿 ○ホームページの内容の充実
- 接触保護者に本校行事へのお誘いを郵送



C103 外部への発信力の強化 ▶p.14

- 幼児教室、幼稚園、インターナショナル教室など、本校単独の講演会ならびに学校説明会の実施
- 様々な業界の方との接触から得られる広報活動(例:ディズニー教材、水産食品メーカーなど)
- 雑誌などからの取材、掲載



教育 | Society5.0時代を生き抜く人材育成 21世紀型スキルとしてのSTEAM教育の推進

C104 確かな学力の伸長 ▶p.14

- 文教大学付属小学校型アクティブラーニングの構築 ○全国学力調査(CRT)の実施



C105 グローバルな人材の育成 ▶p.14

- オーストラリアへの短期留学の実施
- TOKYO GLOBAL GATE WAYへの参加 ○イングリッシュタイムの導入
- 英語ロボットの導入(各クラス12学級分導入)



C106 ICT教育の推進 ▶p.14

- 1年生から6年生まで一人1台PC導入(個人負担) ○日常的なPCの活用
- 系統的なICT教育の推進 ○系統的な情報モラル教育(家庭との連携)
- 文教大学付属小学校型PCBOOK策定と活用



C107 「21世紀型スキル」の育成:STEAM教育の推進 ▶p.14

- プログラミング教育や日常の授業の中で心や頭で考えたものを形にする教育を通して「21世紀型スキル」論理的思考力、課題解決力、想像力、創造力、社会貢献力を育成
- STEAM教育(Science・Technology・Engineering・Art・Mathematics)の推進



研究 | 1時間ごとに成長できる学校「深い学び」の推進 文教大学付属小学校型アクティブラーニングの確立

C108 魅力的な授業づくり・授業力の向上 ▶p.15

- 全教員が年に1回から2回、研究授業を実施
- 全教員が自身の授業を公開「学び合いウィーク」
- 本校におけるアクティブラーニング(自ら考える力の醸成)の確立



C109 教員研修の充実 ▶p.15

- 全教員が夏季休業中は2つ以上の研修受講(夏季休業明けは研修報告会)
- 定期的なICT教員研修
- 社会人としての基本的な姿勢や私学教員としての品格を学ぶ接遇研修



カテゴリー別達成度



児童生活 | 人間愛あふれる「文教っ子八か条」に基づく 豊かな教育の実践と推進

C110 児童による挨拶運動の励行 ▶p.15

- 児童会を中心に挨拶運動を展開 ○登校時、教員による挨拶指導



C111 「文教っ子八か条」の徹底 ▶p.15

- 「文教っ子八か条」の理解 ○八か条の家庭への配布と呼びかけ
- 生活目標への挿入



C112 体験活動の充実 ▶p.15

- 1年生から6年生 全校あがりの宿泊学習実施(富士・尾瀬・富浦)
- 3年生から4年生 八ヶ岳自然学校実施 ○5年生 北アルプス自然学校実施
- 洗足池公園を利用した日常的な自然体験活動



進路指導 | 一人ひとりの夢を実現させる進路指導

C113 一人ひとりへのきめ細やかな充実した進路指導 ▶p.15

- 進路指導部を構成(5年生から6年生担任、進路担当教員で構成)
- 充実した進路指導の資料作成と豊富な実践の提示



C114 付属幼稚園、付属中学高等学校との連携 ▶p.15

- 付属幼稚園の体験入学の受け入れ ○本校児童対象の付属中学校説明会への参加(4年生から6年生及び校長、教頭、教員参加)



C115 文教大学との連携 ▶p.16

- 宿泊などにおける学生指導員ボランティアの受け入れ
- 教育実習生の受け入れ



保護者・社会連携 | 学校教育と家庭教育の連携 地域に貢献し地域に愛される私立小学校としての確立

C116 教育懇談会・個別面談の充実 ▶p.16

- 学期に1回 年間3回 保護者との教育懇談会実施
- 毎学期末に1回 年間3回 保護者との個別面談実施



C117 学校と保護者を結ぶ学校だより、 学年だよりの充実 ホームページの充実 ▶p.16

- 月に1回 学校だより、学年だよりの発行 ○ホームページへの行事掲載



C118 学校周辺地域・東急池上線へのボランティア活動 ▶p.16

- 学校周辺地域、東急池上線石川台駅周辺でのボランティア清掃活動
- 近隣の方々、地域の方々、職員の方々へのご挨拶及び感謝のお手紙



オーストラリア短期留学の充実 国際交流 | 外国語教育の充実

C119 オーストラリア短期留学の充実 ▶p.16

- オーストラリア ファームステイ、ノースレイクス・ステイトカレッジ 8日間の短期留学実施(4年生から6年生希望者)



C120 諸外国との交流の推進 ▶p.16

- オーストラリア ノースレイクス・ステイトカレッジの子どもたちとのレター交換
- 諸外国との交流



※達成度のパーセント表記について 各施策項目で検討した目標に向けた取り組みや数値などに対する達成度合いを以下の達成指標をもとにしたものです。(2025年3月現在)
[達成指標] 100%:プログラムの開始、制度の創設、組織の設置、施設の完成など、計画のすべてを達成/80%:プログラム、制度、組織、施設などの具体的な計画を実行中/60%:実施計画を策定/40%:案策策定/20%:構想段階

主な実施状況

C101 顕在層(学校説明会や幼児教室訪問で出会う層)からの志願者の拡大

大田区、品川区、目黒区、世田谷区を中心に、遠くは横浜市、川崎市まで、幼児教室への訪問を実施し、取り組みを拡大した。年5回の学校説明会(すべて対面)では、本校の魅力を多角的にとらえることができるよう回ごとにテーマを決めて特色をもたせた内容で行っている。とくに2024年9月の学校説明会は定員200組の予約が1か月前に満席となり、活動の効果が出ていると感じている。その他、幼児教室における本校単独説明会の実施をはじめ、在校児童の活動を反映した動画の工夫、在校児童と来校未就学児との触れあいの場の設定などにも取り組んでいる。

【評価・次期に向けて】達成指標は志願者数の定員50名に対し150名以上(顕在層からの志願者140名以上)。毎年度170名以上の志願者数を確保することができた。なお、本校を第一希望にしたきっかけとして、保護者のアンケートには「6年生児童との触れあい」「学校長の話」「国際教育の充実」「前例主義にのっらない常に前進し続ける学校の姿勢」「一人ひとりに寄り添った教育」「教職員のチーム力」「体験活動の充実」などが挙げられている。今後も学校説明会をさらにブラッシュアップした形で継続し、オンライン説明会も、現在よりさらに回数を増やし充実させていきたい。

C102 潜在層(受験しようか迷っている層・受験は考えていないが私立小学校に入れることが可能な層)からの志願者の拡大

新1年生と2年生の出身幼稚園・保育園を訪問し、卒園生たちの学校での様子を伝えるとともに本校の教育内容をアピールするなど、積極的に外向いて広報活動を行っている(2022年度はコロナ禍で各園の訪問が困難だったため、各園へ『学校だより』とお手紙を郵送)。幼稚園、保育園訪問の拡大とともに、アエライングリッシュ「英語に強くなる小学校英語」をはじめとする受験雑誌や書店売り冊子への出稿などにも取り組んでいる。

【評価・次期に向けて】2024年夏に実施した幼稚園訪問をきっかけに確実に学校説明会への参加者が増加している。訪問先の園長から「公立小学校に入学を考えているが不安もある」という保護者が大勢いるとうかがい、本校を認知してもらうきっかけが重要であることを再認識した。本校在籍児童の出身園を訪問することは、園にとっても本校にとっても、WIN-WINの関係で、園から園児家庭を紹介していただくことが増えてきたので、今後も強化していきたい。

C103 外部への発信力の強化

幼児教室を中心に、幼稚園、インターナショナル教室など、本校単独の講演会ならびに学校説明会の実施に力を入れて取り組んでいる。また、様々な業界の方とも積極的にコンタクトをとることによって外部団体の広報誌に掲載していただいたり、外部から外部への認知度が広がっていったりとプラスの方向に進んでいくことで広報活動に手ごたえを感じている。(例:イノカ、国連ユニセフ、ユニクロ、JAXA、南極クラス、ディズニー教材、水産食品メーカーなど)

【評価・次期に向けて】外部団体とのやりとり時間に時間がとられることが難点であるので、その点は管理職が担った。とくに本校の取り組みに好意的な団体とは継続して連携しつつ、さらに新規の外部団体とのつながりも開拓していきたい。



C104 確かな学力の伸長

文教大学付属小学校型アクティブラーニングの構築を目指して、研究授業や協議会の充実を図り、日々の授業においてディベートやグループセッションなど自分の考えをもつことに重点をおいた。また、教員同士の学び合いウィークも実施している。より具体的な指標として、全国学力学習調査の結果分析も行っている。

【評価・次期に向けて】全国学力学習調査では、たとえば、1年生国語(全国比120)3年生国語(全国比126)2年生算数(全国比127)4年生算数(全国比137)をはじめ、全教科において、1年生から6年生まで全国平均から10~20ポイント上回る成績を出すことができた。毎年、研究テーマを決め、児童の学力の重点化を図ってきたことが、近年の児童の学力アップにつながったと実感している。とくに2022年度から2024年度にかけて取り組んできた「言葉のチカラ」は、児童のプレゼン力の伸長にもつながっている。今後も児童相互のプレゼン大会やグループセッションを授業に取り入れながら、点数ばかりでなく、将来的に求められる総合的な人間力や思考力など、「新しい学力観」に立って学力を身につけさせていきたい。

C105 グローバルな人材の育成

オーストラリア短期留学は、2024年度で第9期を迎え60名の児童が渡航した。第1期から第9期まで、延べ約300名の児童が、本校から留学を経験したことになる(2022年度はコロナ禍のため福島プリティッシュビルズへ変更)。また、英語ロボットの導入(各クラス12学級分)やTOKYO GLOBAL GATE WAYへの参加(学期に1回の年3回、3年生以上全員)、イングリッシュタイムの導入、オンラインによる海外との授業交流などにも取り組んでいる。

【評価・次期に向けて】オーストラリア短期留学も2024年度で第9期を数え、「継続は力なり」で、児童の意識として「英語ではなす」ことが、特別なことではなく、日常的なことになっている点に大きな成果を感じている。「国際人」育成のための様々な取り組みは、今後も継続しつつ、今まで英語指導の教員に大きく委ねてきた部分を少しずつ教員チームで楽しく共有できるようにシステムを構築していきたい。

C106 ICT教育の推進

1年生から6年生まで一人1台PCを導入(個人負担)し、日々の授業でも積極的に取り入れながら日常的な活用を促している。タイピングアプリ「らっこたん」を導入し、3年生以上はブライントッチをマスターすることを目標に取り組んでいる。導入に伴って、児童のICT利用に関する実態調査を行い、その結果を保護者に報告して家庭との連携を図っている。また、系統的なICT教育の推進や系統的な情報モラル教育(家庭とも連携)、文教大学付属小学校型PCBOOK策定と活用にも取り組んでいる。

【評価・次期に向けて】いまやPCの存在は、子どもたちにとって、学びのための当たり前の存在となった。インターネットやSNSをめぐる大きなトラブルもなく、ここまで進めてくることができたのは、1年生から6年生までの発達段階に応じたリテラシーを、教職員が導入時より徹底指導してきた成果と感じており、今後も継続していきたい。また、Chromebookが1~2kgあったことで、なるべく児童の荷物負担を減らしたいと試行錯誤しながら、2年前にランドセルを0.8kgまで軽量化したことも、PC促進には有効であったとらえている。

C107 「21世紀型スキル」の育成: STEAM教育の推進

STEAM教育(Science・Technology・Engineering・Art・Mathematics)を推進するとともに、プログラミング教育や日常の授業の中で心や頭で考えたものを形にする教育を通して「21世紀型スキル」として、論理的思考力、課題解決力、想像力、創造力、社会貢献力の育成を目指している。具体的には、プログラミング教育・理科実験・ディスカッション・社会貢献活動などを通して、サング礁ラポ・イノカやユニセフと連携・ユニクロとのコラボ「服のチカラ」・ミツバチプロジェクトと連携、「遊び」と「学び」を結びつけたクリエイティブな活動(「こんなものがあったらいいな」「こんなふうにも動くといいな」)などを展開した。

【評価・次期に向けて】たとえば、4年算数(2022年度128/2023年度137)のように、毎年2月に実施している全学年学力テストでは、年ごとにレベルを上げてきている。これは、STEAM教育の導入による学びへの探究の力が効果を上げていると考察している。また、全国学力テストでも全教科において全国平均から10~20ポイント上回っている。今後も「やらされている学び」ではなく「自発的に学ぶ力」を継続していきたい。

C108 魅力的な授業づくり・授業力の向上

全教員が研究授業を実施(年1回から2回)している。研究主題は「学ぶこと・考えることを楽しむ」、2023年度はサブテーマ「言葉のチカラ」とし、授業後は研究協議会を行い、校内研究の充実に努めている。また、「学び合いウィーク」として、全教員が自身の授業を公開し、お互いの授業の課題や良いところを指摘し合う機会を設けている。

【評価・次期に向けて】毎年の研究授業、夏季休業中の2研修必須、「学び合いウィーク」など、これらを継続することで、教員たちの授業力が毎年上がっており、年3回実施中の保護者のアンケート結果をみても、毎回授業の満足度は9割(2023年度93.2ポイント/2024年度94.2ポイント)を超えている。また、教職員の授業力における相互評価ができるようになったこともポイントである。優れた授業をみること、自分以外の教員に授業をみてもらい感想をフィードバックすること、これらを生かした授業を展開することは授業力の向上に欠かすことのできない要素であり、これまでの方法をブラッシュアップしながら継続していきたい。

C109 教員研修の充実

全教員が夏季休業中に2つ以上の研修を受講し、夏季休業明けに研修報告会を実施している。主な研修としては、全教員を対象とする定期的なICT教員研修、社会人としての基本的な姿勢や私学教員としての品格を学ぶ接遇研修、東京私立初等学校協会主催の教員研修(年間4回)など。

【評価・次期に向けて】保護者アンケートによると、教員の授業への満足度は、常に9割以上の評価がついており、年10回を超える教員研修や教員相互の授業評価が大きな成果を出していると考えられる。毎年の研究授業、教員相互の学びあいは、授業力向上につながる取り組みとして、今後も重視していきたい。

C110 児童による挨拶運動の励行

4年生から6年生で組織する児童会を中心に挨拶運動に取り組み、登校時には、教員による挨拶指導も行っている。これらの成果として、日常的に気持ちの良い挨拶が定着しており、年に3回実施している保護者アンケートでも、毎回、児童の挨拶について9割以上の評価を得ている。

【評価・次期に向けて】学校全体で「挨拶」への大切さを理解し、取り組むことで、明るい気持ちの良い挨拶が飛び交うようになっている。特に本校は縦割り活動が多いこともあり、年度はじめには、6年生がお手本となるよう朝礼で話したり、全校に呼びかけたりしてきたことで低学年にも広がっている。これは本校の誇りの一つでもあり、良き伝統として今後も継続し大切にしていきたい。

C111 「文教っ子八か条」の徹底

【文教っ子八か条】

- 第一条 大きな声で挨拶ができること
- 第二条 背中をまっすぐに伸ばしていい姿勢で過ごせること
- 第三条 素直な気持ち謙虚さをもって人に接すること
- 第四条 人のせいではなく、自分で責任がもてること
- 第五条 めんどろなことは後回しにしないこと
- 第六条 提出物・宿題についてちゃんとやれること
- 第七条 困っている友達にすすんで声をかけること
- 第八条 整理整頓、片付けがしっかりできること

「文教っ子八か条」の理解・徹底に努め、児童の家庭へも八か条の配布と呼びかけを行っている。その成果として、『人間愛』を礎に何ごとにおいても行動に移せるようになっている。

【評価・次期に向けて】八か条が児童の生活に根づいてきている。生活目標に重点項目を設定し挿入してきたことも、成果に結びついてきた要因であると考えている。人として当たり前のことが当たり前に行き届くことこそが、自立に向けての一歩であることを教育懇談会の際にも保護者と共有してきた。今後も学校と家庭が両輪となって、児童の育成に努めたい。「文教っ子八か条」を生活の中で意識しながら取り組むことは、すなわち『人間愛』の実践でもある。

C112 体験活動の充実

1年生から6年生まで、全校を挙げて宿泊学習を実施している。多様な自然体験の中で、自然への畏敬の念をもち、農業や酪農、漁業に携わることで、自分たちが多くの方々に支えられて生きていることを実感し、感謝するきっかけとなる。また、1年生から6年生までの縦割りで活動することで、上級生と下級生の関係から、優しさ、相手を思いやる気持ちを学ぶ。日常生活に「体験活動」という非日常を挟み込むことで、児童の意欲が増し、自発的な学びが生まれ、精神的な成長がみられる。

実施内容は、[富士自然学校:5年生と6年生による飯盒炊飯・樹海散策・ぶどう狩り/尾瀬自然学校:5年生と6年生によるカレーづくり/尾瀬ヶ原散策・りんご狩り/富浦自然学校:南房総の海浜オリエンテーリング/鴨川シーワールド・潮干狩り/海苔づくり/北アルプス自然教室(5年生による地引網・立山黒部アルペンルート・鋳物づくり/白川郷合掌造り・上高地散策)/八ヶ岳自然教室(3年生と4年生による田植え・農業体験・酪農体験・乳しぼり/八ヶ岳散策)/洗足池公園を利用した日常的な自然体験活動]など。

【評価・次期に向けて】10年をかけて体験活動を見直しブラッシュアップしてきたことで、「体験活動の充実」は広報の上でも重要な訴求ポイントとなってきた。体験を通して普段学校で学んでいることが裏づけられるかたちとなり、児童の学力アップにもつながっている。また、保護者からも毎回9割以上の評価を得ている(保護者アンケート「教育活動の取り組み」2023年度94.4ポイント/2024年度94.8ポイント)。



C113 一人ひとりへのきめ細やかな充実した進路指導

5年生から6年生の担任、進路担当教員で進路指導部を構成し、組織的な進路指導を一人ひとりにきめ細やかにあっている。具体的な活動としては、付属小学校対象付属中学校学校説明会や6年生保護者対象の中学受験ラストサポートオリエンテーションの実施、本年度受験予定の中学校訪問など、全学年の教室前に中学受験コーナーも設置している。

【評価・次期に向けて】一人ひとりの希望や客観的なデータをもとにした組織的な指導が志望校への合格につながっている。第1希望、第2希望の中学校への合格者は9割を超え、毎年、継続して進学校へ卒業生を輩出している。[過去3年間の合格校:開成・麻布・早稲田・慶應・桜蔭・女子学院・青山学院・明治・法政など]

C114 付属幼稚園、付属中学高等学校との連携

付属幼稚園を対象に毎年体験入学(2022年度はコロナ禍のため個別に小学校見学)や学校説明会を実施している。また、付属中学校・高等学校との連携については、本校4年生から6年生を対象に付属中学校学校説明会を実施している。

【評価・次期に向けて】付属幼稚園対象の学校説明会への参加者も年々増えてきて手ごたえを感じている。より多くの保護者の関心に応えられるような説明会を継続して行う必要がある。また、付属中学校を第1希望に挙げる児童も一定数おり、説明会参加者も増加傾向にある。今後も付属校との連携を大切にしていきたい。

C115 文教大学との連携

宿泊を伴う体験活動やスキー教室などに文教大学の学生指導員ボランティアの受け入れを行っている。また、定期的に教育実習生を積極的に受け入れている。その他、学びの交流祭の開催、文教大学の教員による研究授業やゼミ生によるイベントなど、文教大学との関わりが増え、本校の教育内容に幅が出てきたと感じている。

【評価・次期に向けて】文教大学との関わりが増えたことで、児童に文教大学学生への憧れが生まれてきているとともに、本校の教育活動も充実したものになっている。将来的に文教大学への進学を視野に入れて学ぶ児童も出てくると思われる。文教大学とのつながりで様々な活動が生まれてくることがとても有益である。



C116 教育懇談会・個別面談の充実

本校では保護者との連携を重視しており、教育懇談会(学期に1回の年3回)をはじめ、個別面談(学期末に1回の年3回)など、保護者が参画に関わる行事はすべて対面・オンラインのハイブリッドで実施し、保護者目線で参加の幅を広げている。

【評価・次期に向けて】教育懇談会と個人面談を実施することで、保護者の悩みや児童の課題を、学校と家庭で相互に情報交換することができる。それが大きなトラブルや行き違いを事前に防ぐことにもつながっている。年3回の保護者アンケートでも、教育活動に関する満足度は常に9割を超えている。

C117 学校と保護者をつなぐ学校だより、学年だよりの充実 ホームページの充実

月に1回『学校だより』と『学年だより』を発行している。2022年度から『学校だより』は、紙ベースのものからCoDMON(コドモン)を活用してオンラインで配信するものとのハイブリッドにしたことで保護者へ学校発信の情報が急激に広がった。また、ホームページに行事を掲載するなど、スピード感をもって情報更新にも取り組んでいる。

【評価・次期に向けて】保護者アンケートでは、『学校だより』『学年だより』『保健だより』について、具体的な好評の声をいただいている。学校からのタイムリーな情報発信、そしてスピーディな情報更新は、保護者のみならず、外部の様々な方々、ひいては受験を考える未就学児の保護者へ向け、本校の勢いと教育への情熱を伝える効果的な方策とらえている。さらに、CoDMON(コドモン)の導入で、個人面談を待たずに保護者の悩みや疑問を知り解決できるようになったことは、学校全体が円滑にまわることにもつながっている。CoDMON(コドモン)に限らず、保護者との連携、外部への発信に有効なものは、時代の流れに遅れることなく常に導入の機会をみてアンテナを高くしていきたい。

C118 学校周辺地域・東急池上線へのボランティア活動

近隣や地域、駅員の方々への挨拶の励行とともに、学校周辺地域、東急池上線石川台駅周辺でのボランティア清掃活動(6年生による「有終の美」活動)に取り組んでいる。2018年度からスタートさせた「有終の美」活動も、しっかり定着して一定の評価をいただいている。近隣の皆様の支えがあるからこそ、毎日の学校生活を気持ちよく過ごすことができる。その大切さを具体的なアクションを通して認識し、感謝の気持ちにつなげる貴重な機会となっている。

【評価・次期に向けて】保護者アンケートの中でも教育活動の項目は常に9割を超える高評価を得ているが、とくにボランティア活動については継続の声が高まっている。地域や東急池上線の皆様とつながる活動を今後も大切に継続していきたい。



C119 オーストラリア短期留学の充実

4年生から6年生の希望者を対象に8日間のオーストラリア短期留学を実施している。プログラムは、ファームステイを通しての自然体験と英語習得ならびにノースレイクス・ステイトカレッジ留学を通しての英語習得である。ホームステイを通して国を超えた信頼関係を醸成し、異文化を体験する。コロナ禍を経て2023年度は4年ぶりの渡航を実現し、2024年度は総勢60名の児童が参加した。

【評価・次期に向けて】オーストラリア短期留学は第9期(2024年度)を迎え、リピーターも多く、児童の満足度や保護者の期待も、年々高まっている。児童のアンケートや作文、卒業生の声からも、この短期留学の体験がいかに人生において大きな影響を与えるものかを考察できる。参加者の中には、中学生の時からオーストラリアに留学し、現在はクイーンズランド大学に通う学生やアメリカの大学で経済学を学び「ディズニーランドのない国にディズニーランドをつくりたい!」と熱意にあふれる卒業生も現れている。そんな先輩に続きたいと願う児童もあり、この取り組みに手ごたえを感じている。今後さらに人数が増えることを考慮し、ノースレイクス・ステイトカレッジ以外にも、交流学校を開拓していきたい。



C120 諸外国との交流の推進

短期留学先でもあるオーストラリアのノースレイクス・ステイトカレッジの子どもたちとのレター交換やスコットランド民謡を通してのスコットランド文化交流、シンガポールの幼稚園とのオンライン交流など、諸外国との交流を推進している。2024年度に行った児童へのアンケート調査では、諸外国への関心度は9割(93%)を超えている。様々な国との交流や文化に触れる体験を経て、日本以外の国がより身近に感じられるようになったことが、アンケートや実際の声からも考察できる。しかも、これらの体験は子どもたちの英語への興味・関心を引き出し、話す力・聴く力の向上にも効果を発揮している。

【評価・次期に向けて】とくに2023年度からスタートしたシンガポールの幼稚園児との交流では、オンラインでつながり、英語で日本の物語の読み聞かせを行ったり、日本の遊びを紹介したりと、豊かな交流がみられた。今後もシンガポールをはじめ、様々な国との交流を図っていきたい。



90余年の歴史をもつ幼児教育のパイオニア

文教大学付属幼稚園

「認める・見守る・ともに楽しむ」という文教スタイルを
保護者の皆様と共有しながら保育・指導を実践し
子どもたちを健やかな成長へと導きます

4年後の目標

満足度が高い選ばれる幼稚園

達成指標

募集定員60人の安定確保

具体的な取り組み

募集・広報 | 安定した入園者の確保

D101 プレスクールの充実(入園審査対象) ▶p.18

- プレスクール参加から志願につながる工夫
- 親子で安心して楽しめる工夫 ○登録方法や実施方法の検討



D102 ぶんぶん広場の充実(入園対象外の0歳児から2歳児) ▶p.18

- ぶんぶん広場参加から、プレスクール参加につながる工夫
- 親子で安心して楽しめる工夫 ○登録方法や実施方法の検討
- 同世代保護者の仲間づくり援助



D103 幼稚園説明会の実施・参加 ▶p.18

- 外部業者の実施する説明会への参加
- 幼稚園で実施する見学会、説明会・相談会の工夫 ○志願につながる内容の検討



D104 ホームページ強化 ▶p.18

- 保護者にとって知りたいことがすぐにわかるホームページ構築(スマホ版含む)
- アクセス回数を増やす工夫の検討 ○入園から卒園まで幼稚園がイメージできる映像・画像の製作 ○更新状況の最適化と閲覧数増の工夫



D105 募集に関わる媒体誌・広告関連の充実 ▶p.18

- 保護者にとって知りたいことが一目でわかる幼稚園案内の製作
- 外部業者の実施する幼児雑誌などへの掲載検討
- 幼稚園で実施する相談会など参加者へ配布する広報グッズの検討 他



教育 | 素直で明るい元気な子どもの育成

D106 “文教スタイル”※の確立 ▶p.18

- ※「認める・見守る・ともに楽しむ」という保育・指導
- 幼稚園説明会や入園説明会、ホームページ、幼稚園案内などで、入園前の保護者に“文教スタイル”の共感を得る周知
- “文教スタイル”を教職員が共有し、在園児・保護者と共に取り組める環境づくり



D107 “学ぶ、をあそぼう。”の実践 ▶p.18

- 幼稚園説明会や入園説明会、ホームページ、幼稚園案内などで、入園前の保護者に「遊び」が教育の中心であることへの共感を得る周知
- 「遊び」を通して「真の学び力(意欲・見出す力・実行力)」が育つ教育活動の工夫



D108 生きる力の土台を広げる「遊び」「運動」「行事」「生活」の充実 ▶p.19

- 学年ごとの「遊び」「運動」「行事」「生活」の園内活動に関する工夫



研究 | 新幼稚園教育要領に則したカリキュラムづくり

D109 指導力の向上 ▶p.19

- 園内研修の充実 ○外部研修会(オンライン含む)への積極的参加
- 指導内容・方法(全体・学年別)の教職員間での共有



D110 勉強会の実施 ▶p.19

- 講師を招いた研修の実施 ○地域ニーズの把握と対応策の検討
- 危機管理の共有

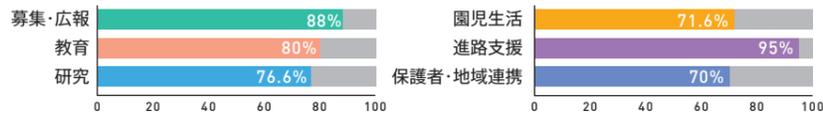


D111 少子化と共働き家庭の増加に対する幼稚園の将来展望の検討 ▶p.19

- 幼稚園の将来展望についての長期方針検討 ○品川区における少子化や保育園の現状分析 ○働く女性の増加への対応策についての現状分析



カテゴリー別達成度



園児生活 | 遊びを通して“生きる力の素”を育む

D112 挨拶や食事のマナー、手洗いうがいなど、基本的な生活習慣の習得 ▶p.19

- 「基本的な生活習慣」を重視 ○毎月の目標設定と周知



D113 動植物と触れあう機会を増やす ▶p.19

- 動物小屋での飼育の実践と動物の命の大切さの共通理解
- 草花や野菜の栽培と田植えや稲刈りの指導の共通理解



D114 保護者との「園児の成長のストーリー」の共有 ▶p.19

- エピソードで綴った「園児の成長のストーリー」の作成 ○保護者への発信内容の精査



進路支援 | 附属小学校及び希望する小学校への進学実現

D115 附属小学校との連携 ▶p.20

- 附属小学校との連携行事の工夫
- 附属小学校推薦に向けた相互連携の検討
- 附属小学校教員と付属幼稚園教員との連携強化



D116 公立小学校スタートカリキュラムとの連携 ▶p.20

- 公立小学校スタートカリキュラムの共通理解
- 公立小学校との連携内容の確認 ○幼稚園卒園者の情報提供の検討



D117 「文教幼児教室」の定着化 ▶p.20

- 「文教幼児教室」に求められる保護者ニーズの確認
- 「文教幼児教室」の広報 ○幼稚園との情報共有



保護者・地域連携 | 保護者との連携強化 地域に根ざした幼稚園の確立

D118 幼稚園が「求める家庭・保護者」の明確化 ▶p.20

- 幼稚園が「求める家庭・保護者」の詳細確認
- 幼稚園説明会・入園説明会で「求める家庭・保護者」を周知徹底
- 幼稚園案内・ホームページによるわかりやすい教育方針・教育目標・教育内容の紹介



D119 保護者との連携強化の取り組み ▶p.20

- 父母の会、おやじの会と幼稚園との連携を深める工夫
- 幼稚園だより、各学年カリキュラムの発信による、保護者との情報共有
- 降園時、各学年で保護者と情報共有(いつでも子育て相談)



D120 地域や家庭のニーズの把握とそれに応える方策の検討 ▶p.20

- 地域や家庭のニーズの把握と方策の検討
- 幼稚園説明会や入園説明会のアンケート結果の検討
- 保護者アンケートを利用した地域ニーズの把握
- ぶんぶん広場で近隣の未就園児(0歳~2歳)へ園庭開放・子育て相談



※達成度のパーセント表記について 各施策項目で検討した目標に向けた取り組みや数値などに対する達成度合いを以下の達成指標をもとに示したものです。(2025年3月現在)
[達成指標]100%:プログラムの開始、制度の創設、組織の設置、施設の完成など、計画のすべてを達成/80%:プログラム、制度、組織、施設などの具体的計画を実行中/60%:実施計画を策定/40%:案策策定/20%:構想段階

主な実施状況

D101 プレスクールの充実(入園審査対象)

プレスクールの実施回数や時間、内容及び登録・実施方法の検討を行い、参加から志願につながる、親子で安心して楽しめるプログラムの工夫などに努めた。手遊びから歌やダンスを多用した楽しい体験企画を検討し、ブログに直近の企画を掲載している。また、ホームページに実施した内容を掲載することで参加者の増加を目指している。なお、プレスクールの登録料は年1回1,000円(2020年度より徴収)で、2022年度から開催ごとにWEB登録制に変更、2023年度から参加人数制限を撤廃、2024年度には開催1週間前にLINEで実施日のリマインドを通知するなどの改善を図っている。コロナ禍を経て2024年度は全8回(実登録者数85名、平均参加者数39.3名 ※2025年2月10日時点)実施した。

【評価・次期に向けて】プレスクール登録者の入園につながった率(入園者数/10月までの登録者数)の変遷をみると、2021年度[28%(39名/139名)]、2022年度[39%(35名/90名)]、2023年度[53%(48名/90名)]、2024年度[54%(50名/92名)]となっている。登録者の半数程度がプレスクールに参加し入園を決めていることが数字にも表れている。また、平均参加者数が39.3名と目標値(80名)に達していない要因は、幼稚園の雰囲気を感じるためにはよい機会となるが、参加回数による入園審査へのメリットがないため、参加するよりも家族時間を過ごしたいと考える家庭が増えているように思う。プレスクールの内容の成熟度を向上させ、通園範囲に住む家庭にアピールしていきたい。

D102 ぶんぶん広場の充実(入園対象外の0歳児から2歳児)

ぶんぶん広場からプレスクールへの参加につなげる工夫を考慮しつつ、実施回数や時間、内容の検討と見直しを図っている。実施回数(平均参加人数/年間登録者数)は、2022年度[全10回(9.7名/85名)]、2023年度[全11回(9.0名/82名)]、2024年度[全17回(10.6名/98名)] ※2025年2月10日時点。2024年度は、ぶんぶん広場と「D121:未就園児向け園庭開放を実施」による園庭開放を統合して内容を見直し、来園する機会を増やしている。登録は初回のみ登録料は無料とし、対象年齢を0歳児から1歳児を未就園児に変更。自由遊びを楽しめる環境づくりを検討し、ホームページに来園者の様子を発信し、参加者増につなげている。とくに2024年度は、未就園児の来園する機会を多くするとともに、幼稚園に来ることを継続的に楽しみにできるように対象年齢の幅を広げた。また、参加できる回数を増やし、雨天時などの天候に左右されずに遊べる場所の提供も試みた。

【評価・次期に向けて】ぶんぶん広場からプレスクール参加を経て入園につながった人数(2023年度プレスクール参加者数/2022年度ぶんぶん広場参加者数)は、2024年度[入園者8名(23名/85名)]、2025年度[入園者13名(22名/82名)]。ぶんぶん広場への平均参加人数が目標値(30名)に達していないが、プレスクールへのつながりは目標値(20名)に届いている。1歳児前後の利用者が増えているため、この年齢のお子様をもつ家庭に本園の魅力を伝えていくことが大切である。また、児童館のおもたちグループで利用する傾向がみられ、口コミやチラシの効果が表れていると感じる。同世代保護者の仲間づくり支援も考慮しつつ、育休中の母親の保育園・幼稚園に関する情報源を探り、今後の広報活動へ生かしていきたい。

D103 幼稚園説明会の実施・参加

広く幼稚園の存在を知ってもらうために、まずは来園していただき施設・環境・教育内容などをわかりやすく伝えるよう工夫をしている。2024年度は、保育見学会(全11回)、幼稚園説明会(2022年度より年2回)、入園説明会(1回)、入試直前説明会(1回)を実施した。会に応じて、園児の活動の姿を写真や動画でわかりやすく説明したり、新事業である長期休業中預かり保育や給食提供回数の増加の説明を行ったり、プレスクール・ぶんぶん広場実施の宣伝広報、園の様子を知る機会として、保育見学会・未就園児参加行事の案内などを行っている。また、参加者へアンケート記入を依頼し、以降の説明時に意見・要望を反映するよう努め、写真・動画などを積極的に発信し、園内の活動の様子をイメージできるようにしている。外部業者の実施する説明会への参加なども含めて、志願につながる内容の検討を行っている。

【評価・次期に向けて】2024年度参加人数は、保育見学会48組、幼稚園説明会74組、入園説明会67組、直前相談会13組であった。来園して説明を聞いていただくことが一番であると思うが、何らかの都合で参加できない家庭や少しでも興味がある家庭が園を知るきっかけとなるよういつでも見学できる体制を整えるなど、知りたい内容を伝えることができるよう多様な伝達方法を検討していきたい。

D104 ホームページ強化

スマホ版も含めて、保護者にとって知りたい情報がすぐにわかるホームページの構築を目指している。また、ブログを随時配信(誕生会毎月、幼稚園行事などの更新)し、公式LINEアカウントからリンクさせ、効果的配信(回数・表示の仕方)を考慮し、未就園児家庭の知りたい情報を見やすく発信するよう努めている。YouTube配信の充実や、「幼稚園だより」を毎月1回発行して保護者アプリ「レイザーキッズ」での配信を開始(2023年4月)するなど、様々な工夫を試みている。

【評価・次期に向けて】ホームページ閲覧数(セッション数)は、2022年度[(11/14~3/31)96.0/日]、2023年度[(4/1~3/31)149.6/日]、2024年度[(4/1~1/19)128.0/日]と、1日50件の目標を大幅に上回っている。ホームページ内の写真の差し替えも含めて、情報が入園希望者の知りたい内容が掲載されているかを常に検証し、必要な情報がしっかりと伝えられるよう計画的に更新の準備を進めたい。

D105 募集に関わる媒体誌・広告関連の充実

幼稚園写真のストック(楽しい企画)、乳幼児雑誌・LINE・広告などによる情報発信、近隣駅へ幼稚園ポスター掲載、近隣児童館用の幼稚園チラシの作成・配布、近隣へ「あそびにきてね」のポスター掲示、幼稚園来園者に配布して喜ばれる広報グッズの検討・製作、幼稚園接触者への継続的なアプローチ、近隣幼児教室向け幼稚園説明会の開催(2023年度11教室/2024年度12教室)などにより、認知度や親しみ感を高められるよう努めた。

【評価・次期に向けて】2024年度は、53の幼児教室(資料送付47教室)と18の保育園(資料送付33園)へ訪問を実施した。訪問活動には大きな効果を感じており、安定した入園者を確保するためには、今後も継続していくことが必須である。とくに保育園訪問は、預かり保育の受け入れ態勢が整うまでは、現在の訪問数を維持したい。入園時に預かり保育や給食の魅力のみで安易に幼稚園に入園するのではなく、保育園との違いを理解していただくことが大切である。様々なチラシなど広報方法については、目新しさやわかりやすさ、構成の変化などに気づかい、保護者に興味をもってもらえる内容の工夫が必要である。

D106 “文教スタイル”※の確立

※「認める・見守る・ともに楽しむ」という保育・指導

幼稚園説明会や入園説明会、ホームページ、幼稚園案内などで、入園前の保護者に“文教スタイル”の共感を得ることの周知、また、“文教スタイル”を教職員が共有し、在園児・保護者と共に取り組める環境づくりが重要である。行事を通して、子どもたちが“文教スタイル”によって育てられていることが実感できるよう、保護者参加型行事の企画の検討や幼稚園の様々な体験から「できた!」「うれしい!」「もっとやってみよう!」という「学ぶ意欲」を確立できるよう取り組んでいる。2024年度は、「親子で遊ぼう会」「母の日パーティー」「七つ星まつり(保護者のダンス見学)」「夕涼み会」「餅つき会」「誕生会」などを実施した。

【評価・次期に向けて】保護者アンケート(2021年度/2024年度)によると、行事や催し物を楽しみにしている(71.3%/86.2%)、保護者として積極的に参加している(46.7%/54.3%)という結果がみられ、アクションプラン初年度よりも保護者の満足度は上がっており、親子参加の行事を楽しみにしている家庭が多いことがわかる。一方で共働きの家庭が増えてきているので行事などの日程告知の工夫なども必要と感じている。

D107 “学ぶ、をあそぼう。”の実践

幼稚園説明会や入園説明会、ホームページ、幼稚園案内などを用いて、入園前の保護者への「遊び」が教育の中心であることへの共感を得る周知を重視しながら、「遊び」を通して「真の学び力(意欲・見出す力・実行力)」が育つ教育活動の工夫に努めている。コロナ感染対策中は、園庭での遊びは学年ごと(直接触れあう縦割り活動は基本的に中止)に行い、降園後の園庭開放も中止していた。2024年4月よりすべての制限を撤廃し、戸外遊び・園庭開放の学年別実施を解除、縦割り活動の充実を図り、自由遊び・外遊びの中で年長が年少をお世話する活動を見直し、実践している。説明会では、縦割り活動での子どもの様子や育ちなどを丁寧に伝え、喜び・共感を積み重ねている。

【評価・次期に向けて】保護者アンケートの結果(2021年度/2024年度)をみると、保育の方針・指導に満足(61.3%/65.5%)と評価が若干高まった。保護者の満足感を得られるよう、園児の生活の様子を含めてどんな情報を求めているのかを把握してコミュニケーションをとっていくことが重要である。

D108 生きる力の土台を広げる「遊び」「運動」「行事」「生活」の充実

学年ごとの「遊び」「運動」「行事」「生活」の園内活動に関する工夫を凝らし、生きる力の土台となる「触れあい遊び」「自然遊び」「生活遊び」「学び遊び」「運動遊び」の実践を目指している。コロナ禍による制限を撤廃した2024年度は、「お泊まり保育」を御殿場市東山荘にて全員参加で実施した。また、「生活のそばで、本物に触れる体験」では、稲・サツマイモ・夏の野菜を園庭などに植えて生長の様子をみたり、1mほどの大きなタケノコをみて、触って、表現したり、「週1回の体力遊び(年長・年中)」では、講師による指導のもと、楽しみながら体の各部を動かし、無理なく運動遊びを行ったりした。毎日の「園庭遊び」では、好きな場所での遊び・友だちとのルールのある遊び・自然・動物との触れあいなどを日常的に行っている。そして、季節の変化に気づいたり、触れたり、面白さを感じたりできる環境づくりを意識している。

【評価・次期に向けて】保護者アンケートの結果(2021年度/2024年度)をみると、意欲的に活動している(77.3%/69.0%)、楽しく通っている(82.7%/85.3%)という結果で、評価が下がっている項目もある。保護者へ幼稚園での様子を伝える方法を工夫することにより、園で大切にしている保育の内容や指導の方法、活動について満足感を得られるよう努め、保育の中で大切にしてきたものを経験の浅い職員へ継承していきたい。

D109 指導力の向上

今後の方向性や保護者の求める幼稚園を考慮した園内研修計画を立案・検討して充実を図り、効果的な外部研修会(オンライン含む)への積極的な参加、指導内容・方法(全体・学年別)の教員間での共有などに取り組んでいる。2024年度は、「特別支援(品川区派遣指導員)の導入」全3回、「園内研修・園外研修・オンライン研修」困った保護者非常識クレーマー対応Web(1名)、ワング東京サマースクール(5名)、就学前教育カンファレンス(2名)、不適切な保育の確認研修(全専任教職員)、エビペン操作確認研修などを実施した。

【評価・次期に向けて】園内研修・外部研修・オンライン研修に一人2回以上参加、ならびに品川区私立幼稚園協会主催研修に一人2回以上参加を達成指標とし、2021年度から2023年度は一人2回以上、2024年度は一人1回程度の参加となった。経験年数に加えてスキルアップのために何が必要なのか、個々のスキルアップに対する意識が高められるように、幼稚園教育に求められるもの、保護者が幼稚園に求めるものを探っていくことが必要である。

D110 勉強会の実施

講師を招いた研修の実施、地域ニーズの把握と対応策の検討、危機管理の共有などに取り組んだ。具体的な活動としては、品川区私立幼稚園長会での協議連絡(職員会議で報告)をはじめ、品川区私立幼稚園協会研究厚生部研修や同協会主催の研修にほぼ全員参加し、日々生かしている。エビペン、AED、防犯、いじめなどの研修は、いざというときに対応し、判断できるように園内での研修を年1回実施している。2024年度の「園内・園外研修(講師招聘)」は、特別支援教育研修会(専任教員3名)、品川区私立幼稚園協会研究厚生部研修(年2回・専任教員各8名)、防犯訓練(全専任教職員)、救急法(AED操作含む)研修、特別支援教育研修会(専任教員8名)などを実施した。

【評価・次期に向けて】2021年度から2023年度は一人2回以上、2024年度は一人1回程度の参加となった。毎年参加している研修は、重ねて参加することでいざという時に使うことができる。外部の研修で得た情報を園内で共有し、幼稚園の財産となるよう研修参加者による研修内容の報告、伝達が必要であり、その後の活用にも工夫していきたい。

D111 少子化と共働き家庭の増加に対する幼稚園の将来展望の検討

品川区における少子化や保育園の現状、働く女性の増加への対応策についての分析を行いながら、幼稚園の将来の展望について長期方策を検討している。詳細としては、品川区未就園児の人数動向調査の研究にはじまり、預かり保育の拡充検討(朝・長期)、給食提供回数の増加検討、園児募集対策会議の実施、リサーチ会社による外部環境のリサーチの検討などを行い、今後の幼稚園の展望の再確認に取り組んでいる。

【評価・次期に向けて】人材の確保・預かり保育の環境整備は重要課題と考えている。安心して保育前後の時間を過ごすことができるよう今後も環境(場所・人材・内容)を保障する努力が必要である。預かり保育への安心感や信頼感をもてるよう園内での様子、時間の流れなどを伝える工夫もしていきたい。

D112 挨拶や食事のマナー、手洗い・うがいなど、基本的な生活習慣の習得

「基本的な生活習慣」を重視し、毎月の目標設定と周知徹底に努めている。具体的には、幼稚園だより(毎月下旬発行、2023年よりアプリで保護者へ配信)や各学年カリキュラム文書(毎月下旬発行。保護者へ配布)を通して基本的な生活習慣の習得を発信、各保育室での担任教員指導(週案活動報告)などを行っている。また、週日誌で振り返りをし、翌日以降の保育へつなげている。教員間の様々な気づきを共有し、毎日の保育の中で、一人ひとりの様子を把握し、必要に応じて声かけを行っている。コロナ感染症第5類移行後の注意事項の周知も継続中である。

【評価・次期に向けて】挨拶や食事のマナー、手洗い・うがいなど、基本的な生活習慣の習得については、学年ごとに達成度の違いがあるものの、3学年全体で考えると80%程度は習得できている。基本的な生活習慣の獲得は、幼稚園だけでできることではなく家庭と一緒に育むものとして今後も周知していきたい。園児には、毎日の園生活の中で必要時に話し、習得まで丁寧に声をかけて指導し、保護者へは、それぞれの生活習慣習得の適時性を考えながら話をし、家庭と一緒に取り組んでいただけるよう協力を求めていく。また、配布・掲示されたものをみていない保護者が増えているため、しっかりと読む・みることを保護者へ周知していくことも大切である。働く保護者層も含めて、どのツールを効果的に使用すると連絡がしっかりと伝わるのか考えていきたい。

D113 動植物と触れあう機会を増やす

動物の飼育の実践と命の大切さの共通理解ならびに草花や野菜の栽培と田植えや稲刈りの指導の共通理解に努めている。動植物との触れあいは、本園のアピールポイントの一つとなっており、動植物との触れあいを通して心を育てていきたい。主な実施内容として、プランター花壇の設置(各シーズン)、プランター野菜の栽培(ミニトマト、キュウリ)、プランター田植え稲作の継続、園内天然芝の一角に芋畑設置*(20株)、西門そばの芋畑の継続(60株)と拡張(80株)、動物との触れあう環境の充実など。*2024年度より天然芝の芋畑の設置は停止

【評価・次期に向けて】2023年度に動物小屋周辺の改修工事をしたことにより、園児にとっても動物にとっても触れあう快適な空間ができている。各保育室で飼育している亀や小動物は、園児の癒しとしての意味もある。玄関周辺の季節に応じた花々や稲・サツマイモなど生活のそばで生長や変化がみられる環境は、園児の心の優しさを育てることにもつながっている。保護者も園庭の植物の生長の様子と一緒に楽しみにしている。ここ数年、暑さ寒さが厳しくなり、動物たちにとっても厳しい環境となっている。年齢を重ねた動物もいるので、健康状態を常にみながら一緒に生活をずる仲間として全教職員で見守っている。



D114 保護者との「園児の成長のストーリー」の共有

幼稚園園庭時に担任教員から保護者あてに毎日のエピソードを伝え、ホームページのブログやLINEで幼稚園活動の報告を行っている。公式LINEアカウントにより登録者に毎日のエピソードなど最新情報を配信し、保育室の壁面装飾(園児の作品)を保護者へ公開している。また、手作りの誕生カードは、子どもの成長を保護者と幼稚園が共有するための大切な取り組みの一つとなっており、「園児の成長のストーリー」としての意味をもち、園生活での姿をイメージし、成長の喜びを感じる機会となっている。

【評価・次期に向けて】保護者アンケートの結果(2021年度/2024年度)をみると、ホームページをよくみているか(34.0%/56.9%)、ブログやLINEをよくみているか(40.0%/56.9%)、など、評価が高まっており、園での様子を楽しんでいる家庭が増えていると推測される。保護者は園だよりとブログの閲覧が多いと予想されるが、ホームページは入園希望者向けの情報発信ツールでもある。園内の様子、行事の様子を積極的に発信するための方法は何か、行事のみでなく日常の保育の様子を発信できないか、ブログやLINEの活用方法や発信内容などを総合的に検討していきたい。

D115 付属小学校との連携

付属小学校との連携行事の工夫や付属小学校推薦に向けた相互連携の検討、付属小学校教員と付属幼稚園教員との連携強化に努めている。具体的な取り組みは、①付属小学校へ年長児訪問、1年生の授業見学・体験 ②幼稚園での付属小学校説明会の実施 ③幼稚園保護者へ付属小学校の情報提供の工夫 ④付属小学校推薦希望者への両親面談の実施 ⑤付属小学校への推薦基準の作成 ⑥推薦までの流れを伝えるミニ説明の実施 ⑦付属小学校へ進学する園児の情報共有などである。

【評価・次期に向けて】付属小学校への推薦希望者が毎年10名前後いる。付属小学校への魅力を感じる家庭、幼稚園からの推薦を願う保護者が増えていることを実感しており、受験に向けてのスケジュールや準備などについての理解も進んでいる。年度別の進学者数と進学率(付属小学校/付属小学校を含めた国立私立小学校)は、2022年度[16名41.0%/19名48.7%]、2023年度[11名18.3%/22名36.7%]、2024年度[7名17.5%/12名30.0%]であった。とくに2022年度の進学率が高いのは、コロナ禍で安心安全・充実した学校生活を送れる場所として私学を希望する家庭が多かったと分析している。付属小学校への進学を含め、幼稚園生活で「学びに向かう力(土台づくり)」をしっかりと育て、付属小学校への推薦基準について保護者へ周知、理解を進めていく。

D116 公立小学校スタートカリキュラムとの連携

公立小学校へ進学する園児の情報を進学先の小学校へ丁寧に提供し、幼稚園生活の中で学びに向かう力をしっかりと育て、小学校生活のスタートがスムーズとなるように取り組んでいる。年長担当教員の公立小学校スタートカリキュラムの共通理解、幼・保・小との「かけはし期」の理解、公立小学校とのスムーズな報告及び連携内容の確認作業の検討、幼児期の終わりに育ててほしい「10の姿」に基づいた個々の課題や成長がみられる指導要録の作成、幼稚園卒園者の情報提供の検討などを行っている。

【評価・次期に向けて】スタートカリキュラムの理解は、関係資料を読みあうことで理解を深めているようにしている。個々の理解度については差があるが、今後も継続して理解を深める機会を設けていく。幼児期の終わりに育ててほしい「10の姿」の再確認、さらなる「かけはし期」の理解と実践も継続して行っていきたい。

D117 「文教幼児教室」の定着化

「文教幼児教室」に求められる保護者のニーズを確認するため毎月1回報告会を実施したり、「文教幼児教室」の広報に取り組んだり、幼児教室と幼稚園との情報共有に努めている。2024年度は、5月の教育懇談会「小学校までに身につけたい力」保護者27組参加(全学年)をはじめ、9月に体験授業、11月に新年中クラス(12名入会)と新年長クラス開講(10名進級)、1月に教育懇談会「私立小の受験報告会」などを開催した。なお、伸芽会による幼児教室は契約期間満了に伴い園内での実施は2023年7月で終了し、現在は理英会による「文教幼児教室」を実施している。

【評価・次期に向けて】幼児教室(理英会)への参加園児(年中/年長)は、2023年度(12名/4名)、2024年度(12名/10名)であった。教育懇談会では保護者の知りたい内容(たとえば、「育てたい力」・「しつけ」など)を講演テーマとし、参加者(保護者)を募り、学びに向かう力・必要な力・家庭の教育力などを考える機会としている。保育後、そのまま幼児教室へ通うことができることは、保護者にとって大きな魅力である。理英会と幼稚園が情報共有をすることにより、一人ひとりの力をしっかりと育てていくことができるメリットをアピールしていきたい。*2023年度は伸芽会との併行・移行期



D118 幼稚園が「求める家庭・保護者」の明確化

入園前の「求める家庭・保護者」と入園後の「求める家庭・保護者」に齟齬をなくするための方策を検討し、幼稚園選びで保護者が共感をもてる「求める家庭・保護者」の追求にあたっている。また、幼稚園案内やホームページによるわかりやすい教育方針・教育目標・教育内容の紹介にも取り組んでいる。2024年度の活動としては、幼稚園案内の制作やホームページの更新などを継続し、説明会(3回)・保育見学会(11回)で「求める家庭・保護者」の説明を行った。9月には保育園と幼稚園の生活の違いをわかりやすく説明し、入園後のミスマッチを防ぎ、「認める・見守る・共に楽しむ」を共有できる家庭を求めている。

【評価・次期に向けて】保護者アンケートの結果(2021年度/2024年度)を抜粋すると、楽しく通っている(82.7%/85.3%)、保育の方針や指導に満足(61.3%/65.5%)、行事や催し物に満足(71.3%/86.2%)、活動や成長が楽しみ(100%/98.3%)、保護者として積極的に参加(46.7%/54.3%)、幼稚園ライフを楽しんでいる(68.7%/80.3%)、入園させて良かった(73.3%/81.0%)など、おおむね評価が高まっている。入園してから「こんなはずではなかった」と思う家庭がないよう、また子どもたちの成長による効果が生まれるよう、入園前に丁寧に説明をすることが今後も必要と考える。近年は、保育園から幼稚園へ入園したいと考える家庭が増えている。保育園の生活から幼稚園の生活へ移行する時に、その違いはもちろんのこと、保護者の教育力などをしっかりと理解することが必要である。今後も、両親ともに就労している家庭の入園が増えると考えられるので、その意味でも丁寧な説明を継続していきたい。

D119 保護者との連携強化の取り組み

保護者が負担にならない父母の役員選出方法の継続(「役員意向調査」による選出)、幼稚園主催行事へ保護者が参加しやすい内容企画、父母の会・おやじの会と幼稚園の信頼関係の構築、ネットを利用したコミュニケーションツールの検討(公式LINEアカウントを適時保護者に公開)、保護者連絡アプリ「レイザーキッズ」の活用(申込・出席簿・幼稚園からのお知らせなど相互の利用、お泊まり保育の様子を写真や動画で該当学年へ配信)などに取り組む、保護者との連携の強化に努めている。

【評価・次期に向けて】「幼稚園だより」はアプリで配信しているので、各家庭で都合のよい時にいつでも確認できるものとして便利になった。預かり保育利用者が増えたことにより、連絡が十分に伝わらないこともあったため、今後はアプリを利用するなどの改善が必要と考えている。父母の会・おやじの会は、意向調査で役員を決定しているため好意的に活動している様子がかがえる。また、各季節の行事・伝統行事を楽しみにしている家庭が多く、園児と一緒に楽しみたいと考える保護者との協力体制も構築されている。幼児期の原体験として心に残り、一生を通じて良い影響を及ぼすような行事となるよう進めていきたい。

D120 地域や家庭のニーズの把握とそれに応える方策の検討

各説明会のアンケート結果の精査、保護者アンケート集計結果を保護者にフィードバック、保護者アンケート結果を抜粋し、ホームページで公開、ぶんぶん広場にきた同世代保護者同士の情報交換、3歳未満児保育園との連携、公開行事(夕涼み会・文教こどもまつりなど)の再開と継続、幼稚園接触者(未就園児)へのアンケートの実施とつながりの継続、課外活動(水泳・バレエ)の内容検討などを行い、地域や家庭のニーズの把握と方策の検討に取り組んでいる。とくにアンケートはニーズの把握にとどめず、集計結果を生かすことにもウエイトを置き、たとえば1回目の説明で「園内進学や学級編成について知りたい」という回答があれば2回目の説明資料に追加したり、「写真で様子が伝わった」という声があれば、一部動画も説明に加えたりしてより伝わるように工夫している。

【評価・次期に向けて】2024年度は課外活動として、「水泳クラブ」「バレエ教室」「文教幼児教室」「スポーツクラブ」を展開しているが、「バレエ教室」が2025年度末に終了する予定のため、それに代わる課外活動の検討を開始している。保護者アンケートにより保護者層の求める課外活動を探るとともに、ワーキンググループでの話し合いも進め、新規の課外活動を見定めていきたい。

経営・管理

学園として選ばれ続けるための基盤を

一層確かなものとするために

教学・経営の緊密な連携による安定したマネジメントと

文教ブランドの強化に取り組んでいます

※達成度のパーセント表記について 各施策項目で検討した目標に向けた取り組みや数値などに対する達成度合いを以下の達成指標をもとに示したものです。(2025年3月現在)
 [達成指標]100%：プログラムの開始、制度の創設、組織の設置、施設の完成など、計画のすべてを達成/80%：プログラム、制度、組織、施設などの具体的計画を実行中/60%：実施計画を策定/40%：素案策定/20%：構想段階

具体的な取り組みと主な実施状況

組織 | 変化に対応できる組織力の強化

K101 教学と経営の連携強化

達成度 100%

○各学校長・理事・担当理事との情報交換会の実施

教学と経営の情報共有の場として、各学校長と理事・担当理事との情報交換会を実施した。情報交換会における議論・意見交換を通じて、幼稚園募集強化ワーキンググループ(以下、WG)と幼稚園中期検討WGの設置、幼稚園での文教生ボランティアの導入及び小学校専任教員採用支援、幼稚園補助契約職員単価の見直しを図るなど、一定の成果を得た。各校の抱えている課題や問題をはじめ、各年度の入試状況や上位校への内部進学制度、各校間連携事業などについて検討を進める重要な場となった。

【評価・次期に向けて】本プラン開始以降4か年にわたり各学校長と理事・担当理事との情報交換会を開催し、学校間における連携の必要性や各学校への経営的施策による支援の必要性について議論・意見交換を実施してきた。各学校への支援については、情報交換会での意見や議論をもとにWGを作成し、WGまたは事務局担当部署において支援の方策を検討し、いくつかの施策を実現することができた。また、(K102)で実施した「学びの交流祭」のみならず、各学校間で本アクションプランを介さず連携を模索し、新たな連携事業が展開されるなど、情報交換会での意見交換や議論が総合学園としての魅力向上の一助となった。本学園の学習者である園児・児童・生徒・学生が、学校間の連携により、総合学園の強み、メリットを享受できるようになるためには、さらなる連携活動や相互支援が必要である。次期アクションプランにおいても当該施策を実施し、各学校長が一室に会って意見交換し、それぞれの学校の魅力が向上するよう努めていくことが不可欠である。そして、各学校を取り巻く環境が厳しさを増す中、総合学園の強みをもっと活かすためには、さらなる学校間での連携活動や相互支援が必要であり、理事・学校長意見交換や他の事業、例えば学びの交流祭や独自の学校間連携事業などをもっと活用して、その実現に向けて取り組む必要がある。

K102 学園内の連携強化

①上位校への内部進学保証制度の現状把握と

達成度 30%

達成度 100%

見直しの検討・検討結果の提供

②各校間の連携強化

上位校への内部進学保証制度の現状把握と見直しの検討及び検討結果の提供と各校間の連携強化に取り組んだ。具体的には、<K101>による「各学校長と理事・担当理事との情報交換会」において、内部進学制度の仮案を提示の上、現状各校における内部進学についての課題点を情報共有した。各校間の連携強化の一環としては、2023年度に実施した「学びの交流祭」の他、クラブ活動やボランティア活動を主とした各校間連携事業を実施した。学園連携イベントについては、創立100周年の際に計画する構想である。

【評価・次期に向けて】少子化が進行する現在、各学校が学習者を確実に確保するための方策として、内部進学率を向上させることは喫緊の課題である。文教大学学園は総合学園であり、幼稚園から大学までの各学校が連携して上位校への進学者増に向けて取り組む必要があるが、学校ごとの教育目標や学習者が習得した(する)学力の問題、各学校が設定する定員とのバランスの問題など、超えなければならぬハードルが存在し、即座の制度設計は困難を極める状況にある。内部進学制度の拡大には引き続きの検討が必要ではあるが、できるだけ早期の実現を目指す必要がある。また、アクションプランに掲げた連携強化事業「学びの交流祭」は、計画した全事業が無事終了している。幼稚園から高校までの学習者が総合学園の魅力を感じてもらおうことはもちろんのこと、教職員間の交流や連携が図られ、総合学園としての一体感の醸成や、本事業に参加した大学生を含めた学習者の成長に大いに寄与することができた。総合学園の一体感を醸成するためには、連携の起点となる事業を継続して実施する必要がある。

K103 リスク管理体制の再構築

達成度 90%

達成度 50%

①リスク管理体制・機能の見直し

②リスク管理体制の恒常的な設置の検討

5キャンパスにおけるリスク管理体制・機能の維持と再検討に臨んだ。具体的には、マニュアル上の役割担当を個人から「部署単位」基準とし、備品リスト「保管場所単位」の新設、校舎配置図のビジュアル更新、冊子マニュアルの配布を個人から「部署単位」基準に変更、マニュアルワークシートの別刷り常設設置などに取り組んだ。また、リスク管理体制の恒常的な設置については、議論を重ね今後も継続していくこととしている。体制整備に向けて、まずはBCP作業部会内での機能強化・分化(構成事務局内の担当などの見直し)に努めていく。

【評価・次期に向けて】事務組織の改編及び東京あだちキャンパス開設に伴い、危機管理規程を再整備し、大規模地震対応マニュアルを刷新した。これにより、2021年度(大学3キャンパス化)以降の実際の学園運営体制に即した内容となっている。なお、改正マニュアルの周知及び訓練が十分に実施できていないことから、今後できるだけ早期に教職員への訓練などを計画することとし、有事に対応できる組織づくりを進めていく必要がある。また、これまで、BCP全体会及びBCP作業部会が担ってきた、大規模災害を想定した「備え」、災害発生時の「運営体制」、そして被災後の学園の「業務継続」計画について、本アクションプランでは、新組織の設置も視野に入れ、恒常的組織(既存組織を含む)での対応への転換を検討してきたが、まだまだクリアすべき課題が残っている。「災害への備え」、「被災時の体制」、「業務継続」などについて、全体的な状況把握、部署横断的な対応や判断が必要となる場面が想定される。これらをいかに円滑に進め、BCP全体会へつなげることができるか、引き続き検討が必要である。

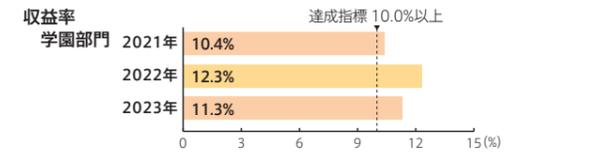
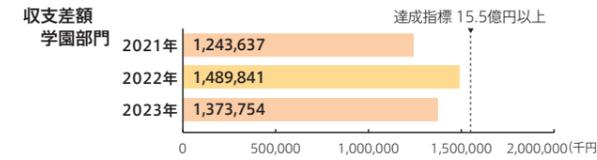
財政 | 強固な財政基盤の確立

K104 学園財政の徹底管理

達成度 88%

○中期財務計画の策定と履行の管理

年度決算確定後、決算数値による学園財政調査(達成指標)を実施した。また、決算数値に基づき財務シミュレーションを更新し、財務方針を策定した。



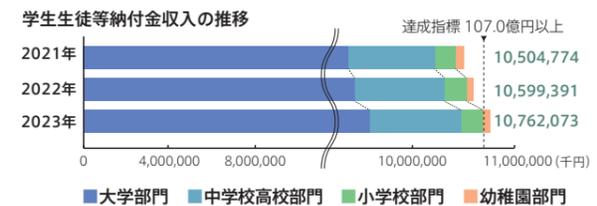
K105 学習者の安定的確保

達成度 100%

○在籍者数計画の策定と履行の管理

「K104:学園財政の徹底管理」の結果と在籍学生数及び入学定員超過率による学園財政調査(達成指標)を実施し、次期財務方針を策定した。

学生生徒等納付金収入 (千円)		達成指標
2021年	9,372,306	97.0億円以上
2022年	9,433,412	7.5億円以上
2023年	9,581,338	1.9億円以上
2023年	80,677	0.79億円以上
2023年	10,504,774	107.0億円以上



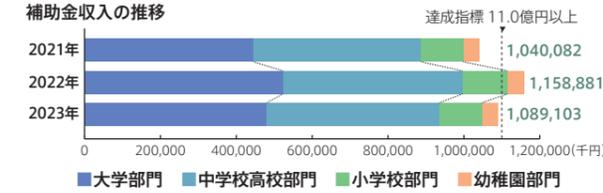
K106 補助金の安定的確保

達成度 98%

○補助金計画の策定と履行の管理

「K104:学園財政の徹底管理」の結果と補助金の状況による学園財政調査(達成指標)を実施し、次期財務方針を策定した。

補助金収入 (千円)		達成指標
2021年	444,598	4.9億円以上
2022年	523,179	4.7億円以上
2023年	479,775	1.0億円以上
2023年	42,867	0.35億円以上
2023年	1,040,082	11.0億円以上

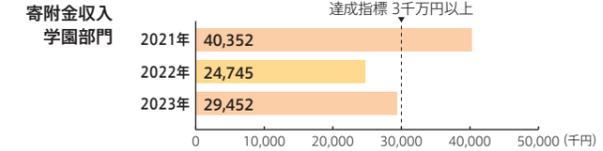


K107 寄附金事業の推進

達成度 96%

○寄附金の募集活動の継続

学園の就学支援・教育振興等に資することを目的とする寄附制度「文教サポーターズ募金」の募集を行った。



K108 経費の検討と変更

○経費計画の策定と履行の管理

「K104:学園財政の徹底管理」の結果と財務シミュレーションを踏まえ、予算編成方針を決定した。経費削減方針策定の有無を検討中である。

教育環境 | 競争力をもった教育環境の整備

K109 長期施設改善計画の策定

達成度 100%

達成度 98%

- ①越谷キャンパス耐震診断の実施
- ②越谷キャンパス新棟の建設
- ③越谷キャンパス再開発計画の検証
- ④長期施設改善計画の策定

越谷キャンパスの耐震診断を実施し、教育環境WGに報告を行った。診断結果として、補助金対象となる15値0.3未満の建物は無く、文部科学省より耐震補強の必要が問われている15値0.7未満の7号館及び11号館の改修が課題となっている。耐震基準が改正された場合、改めて耐震診断を行い長期施設改善計画及び越谷再開発計画に反映する必要がある。また、越谷キャンパスの新棟建設については、2022年夏、14号館LECRO(レクル)が竣工した。越谷キャンパス再開発計画の検証については、教育環境WGを中心に検討を進め、達成指標より1年遅れたものの2024年12月に策定を完了した。計画の実行については、社会情勢、学内の財務状況などを勘案し、適切な時期に理事会にて判断する必要がある。さらに、越谷キャンパス新棟の竣工を踏まえた学園老朽化施設の長期改善計画の検討を行っており、2055年までの設備関係の耐用年数や法定検査などをリスト化し、時期や費用を踏まえて明確な長期施設計画の策定にも取り組んでいる。

【評価・次期に向けて】14号館建設に関しては、建築資材や建築に関わる労務費が高騰する前に竣工できたことは大きい。2年遅れての計画であれば、建築自体を手控さざるを得ない状況であった。建築費の高騰が続いているため、大規模な改修工事や新規の建築にあたっては、社会情勢を十分に見極めて計画する必要がある。また、長期施設改善計画は支出へのインパクトが大きく、財務計画、ひいては本学の重点施策実行へ影響を与えるものであることから、常に更新していく必要がある。

K110 2学部移転後の湘南キャンパスの最適化

達成度 100%

達成度 90%

- ①教育研究機能の再構築
- ②事務棟の機能の再構築
- ③湘南キャンパス事務局運営費の適正化

教育研究機能及び事務棟の機能の再構築、湘南キャンパス事務局運営費の適正化に取り組んでいる。教育研究機能については、教育研究施設(教室・研究室など)を集約

化し、学習者・教育・研究者の利便性を向上させること、学習者同士のコミュニケーションや自学自習を促す、環境を創造することを目標に検討を進めた。2学部が移転したとはいえ、残った2学部の学生・教員の活動を想定外に広く、大胆な集約化はできなかったが、工夫しながらサービス低下にならない範囲で行うことができた。事務棟機能に関しては、利用者ファーストによる見直しを図り、移転による職員数減少に即して、職場環境・衛生管理を整えている。湘南キャンパス事務局運営費の適正化に関しては、サービスの低下を招くことなく、できる限りの支出の抑制に努めた。ただし、達成指標である2019年度事務局運営費(7.2億円)の30%(約2.1億円)の削減に対して、22.3%(約1.6億円)の削減に留まっている。

【評価・次期に向けて】事務棟改修工事に関しては達成指標より1年遅れで進行し、2024年度に完了した。本プランに関しての取り組みはほぼ完了しているが、今後については学部再編、キャンパス構想の影響によるところが大きい。

K111 湘南キャンパス活性化の検討

達成度 20%

○2025年3月、湘南キャンパスの活用方法の策定

中長期的な観点による湘南キャンパス活性化具体案の検討、2学部移転後の2031年以降の活用方法について、外部からの提案を整理し再度交渉を行っている。候補として、神奈川県教育委員会、東都リハビリテーション学院(学校法人小関学院)、商業施設(イオン)、民間企業の誘致などが挙げられている。

【評価・次期に向けて】交渉相手があつての履行できるかである。また、学部が既存している中、遊休施設の利用相手を探すのは困難を極めている。やはり、(K110)同様、今後の学部再編やキャンパス構想の影響によるところが大きいと言わざるを得ない。

学園ブランド | 学園ブランドの強化

K112 学内者への学園理解の再構築

達成度 90%

○100周年を見据えた、学生・生徒・児童・園児及び教職員への学園の歩み・建学の精神の理解促進・深化

100周年を見据えて、学園内状況確認による現状の把握及び学内者への学園の歩み・建学の精神の理解促進を図るための企画を検討。結果として以下の2つの施策を実施した。①校歌のチャム制作(ブランドを音で表現するサウンドロゴの有効性に着目し、在校生や卒業生の共通の音楽である校歌をチャムとして使用。2023年4月から各校舎で使用)②漫画「馬田行啓と小野光洋」制作(創立者の活動や学園のルーツを再調査し、全校共通の自校教育補助コンテンツとして、創立者の生涯や功績、学園の創立の起源を年齢問わず受け入れやすいよう漫画化。2024年4月から公開)

【評価・次期に向けて】校歌をチャムにしたことで、校歌の認知度が深まり、在校生や卒業生の間で共通の音楽として親しまれることが期待される。また、これまでになかった学園共通の自校教育補助コンテンツとして創立者の生涯や功績をまとめた漫画が完成した。この漫画の制作にあたっては、国会図書館などの徹底した調査を行い、文献に基づいた史実の整理がなされた。この作品は学園関係者にとって貴重な学習資源となるとともに、100周年に向けた学園の歴史についての地盤整備につながったものと考えられる。創立者の功績や人柄についてさらに掘り下げる余地や漫画で扱った時代以降の情報整理も残されており、引き続き調査やコンテンツ整備を行っていく。これらの共通コンテンツを広く認知させ、学園理解の深化に向けた学習機会を提供することが今後の重要な課題となり、認知広報活動や、学内での学習機会の継続的な提供につなげていきたい。

K113 卒業生とのさらなる連携・絆の強化

達成度 60%

○100周年を見据えた、卒業生とのさらなる連携強化

学園100周年に向けて卒業生とのさらなる連携と絆の強化を目指すための企画も検討している。学内の卒業生との連携状況を確認し、他大学の事例を調査した結果、①卒業生との交流施策(対面やウェブでのイベント参加型、コンテンツ閲覧型、卒業生特典型など、形式別に交流施策を検討の上、イベント参加型での実施を決定)②卒業生との新たな連絡手段の模索(卒業後も継続してコンタクトを取れる手段を検討。在学時に付与されるメールアドレスを生涯にわたり使用可能にする案、卒業生コミュニティサイトの構築案、SNSアカウントの収集案など、より効果的な方法を検討中)を進めた。なお、2022年度より、学園と校友及び校友相互の親睦を深めるための交流イベント「BUNKYO校友フェスタ」を実施しているが、参加者数は2022年度339名、2023年度629名、2024年度590名と推移している。

【評価・次期に向けて】「BUNKYO校友フェスタ」には多くの卒業生が参加し、その中には多数のリピーターも含まれており、卒業生とのより強固な関係性を築ききつかけとなりつつある。本施策による寄附状況の顕著な変化は認められなかったが、引き続き卒業生との強固な関係づくりを通して寄附の獲得にも取り組む必要がある。一方で、潜在層や新たに卒業する世代へは学園に関心を戻してもらうための効果的なアプローチ方法の模索が求められている。WGでは従来の郵送から情報技術を活用した新しいアプローチ方法へのシフトを意識し、卒業生へのメールアドレス付与案や、卒業生コミュニティサイトの構築案などを検討したが、費用対効果の観点を満足させる具体的な施策企画には至らなかった。卒業生との連携・絆の強化は私学において重要な施策の一つである。各校種別だけではなく、潜在層・在籍層とのセグメント別での課題設定と施策立案が効果的と考えられている。